

うさしト元の伏見へ着いた事一向氣がつかず。

宿の女「何方もお支度上げませうか」

彌「ライ此所へ御飯頼みます」

女「ハイ〜」トたき立てめしに入はい豆腐の平をつけて来る、是は伏見の船宿の定めなり、兩人始めてなれば斯る事少しも知らず早大阪へ着ひたる心にて、

彌「今日は斯う致そう、是から長町の分銅河内屋と云ふ宿屋へ行つて彼も大和の初瀬の茶屋でよこした書付の所だから彼所へ泊つて直に芝居でも見よふじやねへか」

北「おいらア又新町とやらを早く見てへ」

彌「ア、其もまん更でねへの、ア、ア剛的に熱い汁だナアベ〜」

其傍には船から上つたばかりの四人連の客が仕度をしながら其一人が「太兵衛さん〜お前虎屋の饅頭は何うしたい……」

太「六兵衛さん、聞いて呉れ妙な事ぢア、昨日わざ〜向ふへ行つて買つて来て、頓と河六の店へ忘れて来た」六「ちアツイ一走り行つて取つて来るが宜い、此處から僅か十里位ひだから」

太「ハ、ハ、其んなに冷笑して呉れるナハ、ハ、ハ、」
此の話しを聞いて彌次郎兵衛不思議そうに 彌「モシ貴郎方が今云ひなさつた虎屋と云ふのは、たしか大阪でございますね」

六「左様／＼」

「その虎屋の饅頭を忘れたと被仰た河六とやらは何處でございます」
六「河六は日本橋北詰を東へ行つた處ぢやア」

「へエ、その日本橋北詰を東へ行く處までは、此處から幾里ほど
ございます」

六「此處からは十里ぢや」

「ハテナ大阪は思ひの外廣い處ぢや、ノウ北八」北「ナニサ宜い加
減に開いて置きねえ、私ち等をひやかすのだ、此處から十里もあつ
て堪るものか途方もねえ」

太「イヤお前さんは此處を何處ぢやと思つて居るのだナ、此處は伏

見の京橋だせ」

「ナニ伏見だ……こりア北八が云ふ通り貴様等ア人を馬鹿にしや
アがるナ、俺らア昨夜伏見から船に乗つて來たのだぞ」

太「何を云つて居るのだ、桃山の狐につまゝれたもんじやろぞい、
皆此方へ退て居やんせ」

北「己等を狐付たア何のこつた、江戸ツ子だぞ」

トいさくさ中彼の大阪もの、連と見へ二三人入來「何んじやい、
其よりこちやぞゑらい目に遇ふたわいの、私の包を船で失ふたゆ
い」

ト彌次郎の側を見るに正しく自分の包なればやるの遣らじと争ひつ

彌次郎能く見て 黒「ハテめん妖な、モシ愈々此處は伏見に違ねへかね」

皆々「ハ、何ぬかしくさる」

大取人「イヤ此奴等だ、太え奴等は、太いも細へもあるものか、而し包に別條ねへから免してやる、トツ／＼と出て行きくされ」黒「コリキ飛だ目に遇ふが薩張解らぬ、北八如何したのたろふ」

北「されば私も分らぬ、全體ゆふべは何日だつけ」黒「ム、昨夜は自分に出たから大方二十四五日頃だ」

黒「今月は何か小か、昨日は何の日だねへ」

黒「去れば斯うと此間其れ何處でか泊つた時甲子だと云つたぢアね」

免か

北「ソレ／＼アノ茶飯は美味かつた、お平の午券も大きかつたが、あいつは珍らしい」

皆「ワツハ、こりア何うでも那奴らは本氣ぢやないわい」腹の筋を燃りながら大笑ひしている、此の時この中に居た年輩の太郎兵衛暫らく考へて、

太「ハ、ア判つた事がある、なるほど餘り伶俐そうにも見へないお前さん達だから、人の物を盗む程の悪い事も能うしなからう、こりア斯うぢやお前達、昨夜伏見から船に乗つて、途中から船の繋つた時用足しか何かで堤へあがつた事があるだらう」

「へエ、左様でございます」

「本ッソレ、私共が船からもアノ時堤へ上つた人が大分あつたが、
聴て船が出ると云ふと皆狼狽へて船に乗り込んだ其時、お前達は下
り船と上り船を間違へて、銘々の乗つて来た船と思つて、又上りの
船に乗つたものだらう」

「北」ホソに左様でございます、私ちも船に乗つた時暗がりではあ
るし、取違へた事は知らず、何うやら居處を違へた様にも思ひまし
たが、何んしろ乗合の事だからまゝの皮それなりで、疲勞れ紛れに
ツイ寢て仕舞ひまして、今朝此處へ来て見ると乗合の乗のうちに見
知つた顔が、一人もねえは不思議な事だと云つて居りました」

「然う云へばなるほど、今の先き船の上り場でハテ見た様な處だ
とは思ひましたが、見た筈だ矢張り初手の伏見なものハ、つま
りそれ故お前方の包みを私ちのだと思つて粗相致しやした」北「是で
物が薩張解つた」

「イヤ解る事解つたが己等の包は如何したらう」

「大」其は分つて有るわいな、お前方の乗らした下り船に包み計り
残つて今頃は大阪の八軒屋に風呂敷の包がうろくとお前方を尋ね
て居るぞいなハ、」

「北」頼だ目に遇つた忌々しい」

「まゝ、何うするもんだ、金は胴巻に入れて持てゐるから、只々」

包は手前と巳が着替計りだ、投つて仕舞ひ其邊は江戸ッ子だは」
ト惜しけれどもせん方なく是から又船に乗つて大阪へ尋ねて行くも
馬鹿くしいと直ぐに京都へ行くつもりに相續きめて立出れば此の
人々も其々に此所を立出でければ北八彌次郎氣拔した顔付にておら
りく〜と京街道にさしかかりぬ。

伏見出て淀の車かまたあとへ廻りまはつて來はた何事

墨 染

其より伏見の町を打過ぎ墨染と云へる所に差掛けるは此所は此の
遊び所ありて軒毎に長簾掛け渡したる中より顔のみ雪の如く白く

青梅の布子に黒天絨の半襟まで白粉べたく〜付けたる女走り出て途
行く人を引き止める 女「モシナお遣入りなさい、一寸遊びんか」
男「何んだ止せ止せへ〜」と振り切れば今度は北八を捉へ 女
前さんどうじやいな」

北「こうじやいな」トべつかんこうする。

女「ヲ、好かん人や……」

男「アハハ、此所があとで聞いた墨染だな」

すみぞめのおやまのかほの眞白さは石灰蔵のねすみころもか
深草の里は家毎に焼もの土細工を商ふと見ゆれば
焼物の牛の細工に買う人もよだれたらして見とれこそすれ

斯くて藤の森に到りけるに、

稻荷山松のふぐりに掛れるはふとしのさがり藤の森かな

こゝに稻荷の社を伏し拜みつゝ、北「なんと其處らで一服やらうとやアねへか」

彌「よからく〜」ト茶店に遣入る。

彌「ヲヤ甘酒があるの婆さん一杯くんな」

婆「ハイ〜温ふして上げようわいな」

北「コウ彌次さん、此處の婆さんがお前に氣があるぞ見へて可憐な目付きをしてらア」

彌「馬鹿ア云へ、婆さん何うだ早く呉んな」

婆「マア些と待つてお呉れよ」云ひながら此の婆ア、彌次郎兵衛の顔を見ては泣き見では泣きしている様子だから、彌次郎兵衛は不思議に思つて、

彌「婆さん何うかしたか、お前エ目でも悪いか」

婆「妾アお前の顔を見て、大變悲しうなつて來たわい」

彌「ソリヤ何うして」婆「ワアイ〜」

北「此奴は可笑い、婆さん何が悲しい」婆「私が此間一人の息子を失ふたのが、其息子に彼の方が似たところいへ〜」

彌「ハア已等に似たとかへ、其じやお前の息子も好い男であつたらう、惜い事をした」

婆「ソレ其のドラ聲の物言からお前の様にあらいめつちやが有つて色が黒くて鼻が獅子鼻とやらで目の大い所迄が其のまゝじやわいな」

男「其れじやア私が顔の悪い所計りが好く似たの」

北「悪い所計りも氣が強い、好い所は一つも無へ」

婆「其れ計りやないわいのアノ片小鬚のはげさんした所迄が彼様にも似るものかいな」

男「人の顔の店卸がすんだら其の甘酒を早く呉んな」

婆「ほんに忘れたわいな」

二人に出す、二人のみながら 北「強敵うすい甘酒だ」

婆「うすふもなりましたぢや

わいな」

男「エ、頓だ事涙計りなら未だしも見りやお前水鼻をたらして居候が、其れも此中へ落やせんかね」

婆「妾しや見なさる通り三ツ口じやさかい、鼻水とよだれを二ツに其中へ落したわいな」

北「エ、コリヤ情けない事を云ふ、此奴は最ふ飲めぬ」男「俺アつい飲んでしまつた、忌々しい、サア行かふ」

北「婆さん幾錢だ……」

婆「ハイ六文づゝくだんせ……」

北「水鼻はおまけたのアイお世話ベツ〜」ト此所を立ち振り返りながら、

縁言に涙を交せて水涕もすゝり込んだる婆が甘酒

かくて二人は足に任かせて廻り行く程にだん〜都近くなりて往來殊に賑はしく、人の風俗も自然と温順にして、而も衣装は花やきたる女の粧ひに現を抜かして見とれ行くうち、早くも大佛前に到りて、

北「アヤ〜剛せいなお寺だ、アレ山門の上から、佛様が覗いて居る〜」

南「ハアこれがあの大佛だはへ、成程話に聞いたよりは剛敵なもの

だ、そして此の石を見やゑらい〜

と寝めながら一首を詠む。

大佛の御堂は雲に入るとてや是は大きなものゝ天上

斯く詠みて山門の内に入り應て御堂にのぼりける。

京都

大佛殿方廣寺本尊は座舎那佛の座像、御丈六丈三尺堂は西向にし

て東西二十七間南北は四十五間あり、彌次郎北八此に法施し奉り

て、

南「何と話に聞たより豪勢なもんじやア無へか、彼の斯うして御座

るお手の平へ疊が八疊敷けるそうだ」

北「狸の金玉と同じ事だな」

「もつたいねへ事を云ふ物だ。アノお鼻の穴から人が傘を指て出らるゝと」

北「ソリヤ未だしも人が指て出るから好いが己が方の棒だら八が鼻の穴からは瘡が獨でに吹出したは」

「馬鹿云ふな。お後へ廻つて見よふ、ヲヤお脊中に窓が明てるらア」

北「彼は大方汐を吹く所だらう」彌「鯨じやアあるめへし」北「ヲヤくアレ皆が柱の穴をくつて居るは」

彌「ほんに奇妙く」

北八も此の柱の穴をくつり、毛「ソリヤ面白い、しかし俺は潜れるが彌次さんは太つて居るから抜けられぬえ」

彌「俺だつてナニこれが……」

北八を搔け退けて四ツ匍ひになり、柱の穴へ身體を半分ばかり這入つたが、何うしても太つているから抜けられない、オヤツと思ひながら後へ戻らうとするど脇差しの鍔が横腹に支へて痛くて堪らなから、彌次郎兵衛は顔を眞赤にして、彌「アイタ、こりア飛んだ事をした」

毛「オヤ何うした抜けられぬえか」

彌「コレ手を引張つて呉れ」

北「ハ、ハ、これは可笑しい」彌次郎兵衛の兩手をグツと引く。

彌「アイタ、ハ、ハ」

北「弱い男だ、些と辛抱しろ」彌「後の方から足を引いて呉れる」

北「承知」後邊へ廻つて兩の足を持ち 北「ヤアエンサア」

彌「アツイタ、ハ、ハ」

北「些と堪へなせえ、餘程出掛けた様だ、エンサア」彌「ア、待つて呉れ」腰骨が折れる様だ、こりア矢張り前の方から引出して呉れ」云ふから北八は又前へ廻つて兩手を捉へて引張る。

北「ヤアエンサア」ソレ又此方へ餘程出て來た」

彌「こりア堪らぬ、アイタ、ハ、ハ、北八これでは不可ぬ、初めの様に又後へ引き戻して呉れ」

北「エ、いろ／＼な事を云ふ」

又後邊から兩足を握んで 北「ヤアエンサア」

彌「待つて」こりア何うでも前の方から引いて貰をう」北「エ、其んなに前へ廻つたり後邊へ廻つたり、引き出しては引戻し、何時までも果しが無え、こりア宜い算段がある……」

側に見ている人を頼んで 北「モシ何うぞ此方からお前さん引張つて下さいまし、私は彼方へ廻つて足の方から引摺出しますから」彌「馬鹿ア云ふナ、兩方から引張つては出る瀬がねえ」

北「出る瀬がなくつても両方から引張ると、前へ廻つたり後邊へ廻つたりする世話がなくて宜いわな」

參詣人「イヤ両方からアノ人の身體を引張ると、伸びて来るからツイ出られそうなものぢや」

北「こりア宜い事がある、酔を一升も買つて来て彌次さん、お前に飲ませよふ」

彌「なせ……酔を飲むと何うする」北「ハテ酔を飲むと瘦せると云ふことだから……」

彌「痛い……」と少しづつはへ出して来た。

參「ソリヤ出たぞ〜」

と漸く引き出せば彌次郎大汗になり體を拭き〜ホット溜め息つきながら、

彌「ヤレ〜有難い、コリヤ何方も御苦勞でムい申した、此方先度伊勢の泊りで産をしやしたが、産むよりか、生れる身は餘ッ程せつねへ、コレ着物がすり切れて、あばら骨が今にピリ〜する。

傘さして出るお鼻より柱なるあな恐ろしや身をすばめても斯くよみ興じて大笑ひとなり夫より境内を廻り蓮花王院の三十三間堂にて、

いや高さ五重の塔にくらべ見ん三十三間堂の長さを是より此の御門前を北へ指て行くに往來殊に賑はしく、げにも都

の風俗は男女どもに何處どなく柔和温順にして、馬士歩荷持までも洗濯布子の糊強きを折目高に衣て、あのおしやんすとなまめきたるも可笑しく、二人は興に乗じ、目に見るもの毎に珍ら敷く辿り行くうち俄に往來騒ぎ立ちて老若走り行く人毎に、

『ホウ／＼よい／＼』

彌「むしやうに人が走るが何だ、イヤ向ふに何かある。モシ／＼何で御座いやすね』

向より來る人「彼所に豪い喧嘩あるわいの』

北「京の喧嘩珍らしい』

ト足早に行けば見物山の如く是を押分け見れば、一人は肴屋と見へ

て其所にはん臺など置きあり、一人は職人體の男にて京の人の常として互に氣もゆう長にして、頭からたゞき合もせず日向よき所に立ちて、

職「コレ我身の方から行き當りくさつて、其様な事言ふもんじや無いわい、頭打つて凹まそかい』

相手「置さくされ、こんたが手の動くのに此方じつとして居やせんわい』

と種々に罵り合つて喧嘩して居たが、後には損徳を考へて止めにしたので大笑ひとなる。

公家衆の居ます都は自から喧嘩やめるもうたごよみけり

斯く打興じて早くも清水坂に至るに兩側の茶屋軒毎にあふぎ立つる田樂の團扇の音喧しきまで呼び立つる聲々 女「モシお這入りなされ茶ちやあがつてお出んかいな……」

女「名物なんばうごん上らんかいな、お休みなされ〜……」

「何を食ても好いが最つと先へいつてからの事にしよう」と程なく清水寺に至り境内を廻り音羽の瀧を見て、

名にしおふ音羽の瀧のあるゆへ歎上りつめたる清玄の戀

本堂は十一面千手観音なり、昔し沙門延鎮が夢中に得たる靈像にして坂上田村麿の建立とぞ、北入、彌次郎兵衛しほし此の寶前に休みながら、

境内にうへし櫻はすき間なく手もたくさんな千手観音

傍の小高き所に机を控へたる老僧參詣を見かけて「當山觀世音の

御影は是に出ますぞ、誠に靈驗あらたなる事は旨が物云ひ啞の耳が

聞え歩いて來たいざりが全快、一度拜する輩は如何なる無病達者

なりとも忽ち西方極樂淨土へ救ひ取らんその御誓願ぢや、何方も頂

いて御歸りなされ冥加錢は澤山にお心持次第御信心の方はござりま

せぬか」

北「能く饒舌る坊主めだ、時に彌次さん、彼の傘をさして飛ぶと

云ふは此の舞臺からだな」

鳥昔から當寺へ立願の方は佛に誓つて是から下へ飛れるが怪我せ

んのが有難い所ぢやわいな」

「此所から飛んだら身體が粉になるだろ」北「折りくは飛ぶ人もありやすかね」

僧「左様じやわいな、ゑては氣のくれたわる達が来て飛び降りるがな、此間も若い女中が飛ばれたわいな……」

北「落ちてそれから何うした」

僧「ハテ根問ひするわるぢや、此女中罪障が深いさわい、佛の罰で目を廻したわいな」

北「鼻は廻さなんだかね……」僧「イヤ瘡と見へて鼻はなかつたわいな……」北「それからどうした……」

僧「氣が付いて百萬遍を始めたわいの……」

北「コレサ百萬遍の後は……」僧「南無阿彌だんぶつ……」

北「其の後はよ」僧「ハテ忙しない」

ト追つ立てられて、ホウ／＼坂を下り、北「づく入奴がとんだ目にもはした」

舞臺から飛んだ話は清水にひやかされたる身こそ口惜き

此の山内を下り行く先に清水焼の陶物造り軒を並らべて往來の足をどごむ、此の所の名物なり。

天道の恵みもあらんすへもの師大日山の土を製せば

京の五條

斯て其日も早七ツ頃と覺しければ、急ぎ三條に宿を取らんと道を
早め行く、向より小便擔と大根を荷ひたる 男「大根小便しよ〜」
北「ハ、ハ、ハ、唐茄子が笛を吹いた見世ものは見たが、大根の小便す
るのは遂ぞ見た事がねへ」

彌 あれが彼の大根と小便と取替にするのだらう」

肥取「大根と小便しよ〜」

ト中間らしき男二人來りて「コリヤ〜私等二人が此所で小便して
遣るが、其の大根三本おくんさんかいな」

肥「マア此所來てして見さんせ」ト新道へ連れ行く、彌次郎北八何
するものかと後よりついて行き見るに、

肥「サア遣らんせんかい」ト小便桶を直すと一人の男が「アリヤ私
先へやろわい」

ト此内二人ながら小便して仕まう、肥取り桶を見つゝ「最う是限で
出んのかいな」

中間「打留に屁が出たから最ふ小便は是ぎりじやわいな」肥「コリヤ
あかんわい、今一度能ふ體を振て見さんせ」

中「ハテ小便くすてな何にせうぞへ」肥「其ちや大根三本は能うやら
んわいな、二本持ていかんせ」

中「コレ小便は少なうても此方とらのは品物が好いわい、他所の茶粥計り喰て居るのとは違ふて此方肉計り食て居るがな」

肥「其れちやとて餘りちやわい」

中「ハテ八釜敷い家へ持て行て水交りや三升計りにや成るぞへ早ふ三本呉んせ〜」

肥「其なら其所らで茶でも呑んで来て今少と遣らんせ〜」トたがひに争ふを二人はおかしく見て居たりしが、

北「モシ〜幸い私が小便仕度くなつたから無様ながらお前方に上げやせう、是をして大根三本取りなせい」

中「お志は忝けなふ御座んすが、其では御氣の毒様ちやわいな」

北「ハテ宜いわいな、何せ有合せで輕少なれど」

中「左様ならお小便敷きませうかい」ト桶を北八の前に直す 北「サア出ました」

肥「イヤお前達のは地では無いわい、兎角小便は關東が宜う御座ります。地のは薄ふて價値がない」

北「最少と早いと未だ出たものを」

肥「お連れ様もあるそらちや、モシお前も序に手水してお出んかいな」

肥「イヤ私は前渡迄一斗二斗は苦もなくしたが、近年は小便づまりで薩張り出ぬには困り果る」

北「ハハ、時に運くなつた、サア往きやせう」と打笑ひながら行くに、此所は五條新地とて遊所である。

女「モシナ〜」と彌次郎の袖を引く。

彌「何んと北八一層のこと今宵は此所に泊りは如何だ……」北「如何にも〜荷物はなし」

女「サア這入りんかいな……」

と呼ばれて二人は此樓に上る、其夜敵娼に欺されて、缺け落ちの約束をしたが、敵娼は他に男があるので彌次郎を甘く欺して逃げて行く、其朝樓主之を覺りて大いに怒り彌次郎、北八の二人を縛つて置く。

此の騒ぎに近所の者思ひ〜に見舞に来る、此の中に十吉とて同じ商買の亭主、少しは理窟の分る男らしい。

彌次郎と北八の二人が相談して女郎を逃亡させたと聞いて、先づ二人に對へ、

十吉「是れ〜此方さん達は悪い合點じやわい、ソリヤ友達づくなら頼まれない物じやないが、最ふ此様に解れては仕様事がない、有體に云ふて各々の身抜けするが宜いわいの」

彌「私等はからさしも何も知りやせん、只々買つた計りで疑受けたと云ふ物だから何卒貴郎の取持で助けて下さいませ、コレ手を合せて拜み度くても縛られて居るから足を合せて拜みます、コリヤ〜」

北八もお頼み申せ」

北「ハア南無なむ念ねん仏ぶつびら大権現様、此の災難を免れます様に南無奇妙頂來らい」

亭「エ、足も手も摩らずとも尻ねぶりくされ」

彌「イヤ御尤で御座りやす、私等こそは此の男めが卷添へほんの災難、そして此んな目に合ひますと、持病の癩が差込んで、ア痛アイタ、」

亭「しやくが痛いなら胴中の繩を最少と堅うめてやるかい」

彌「イエ、私が癩はしんくおどると癒りやす」と云ふも聞かす散々にいちめて、

十「サア最ふ勘忍してやるから、サツサと出て行くがい、アハ、裸體で出られないのか、サア此所に炭俵があるから、これでも着て行くがい、」

と炭俵を出して北八の前に置く、北八これを見て呆れ顔。

亭「サア、早くせんかいな」と急ぎ立てる。

北「其れを着ろふとかい、エ、情けない事を云ふ」亭「折角巳が志じや着て歸んかい」

北「ハイ有難うございやすが、私は矢張り裸體が勝手に御座りやす……」

彌「外聞の悪い男だ、己等が合羽を貸して遣らふ……」と彌次郎が

木綿の合羽を取つて北八に打ち着せる。

うとましやかいたる耻も赤はだか

合羽つかしき身ではなりたれ

はては大笑ひとなり二人はやう／＼の事にて此所を逃れて立ち出

でけるとなり。

京見物

或人の句に「花尊と都に本寺／＼かな」と詠みたりしは、實にも
寺院堂塔の廣大無邊にして其莊嚴麗秀なる云ふも更なり、殊に花の
春、紅葉の秋には東西南北に名たゝる勝景の地ありて、加茂川名酒

の樽と共に人の魂を飛ばしめ、商人の好き衣着たるは他國に異に
して、京の着倒しの名は益々西陣の織元より出染色の花柳たるは堀
川の水に清く、釜元の白粉は川端の節の粉は雪を欺むき、御影堂の
扇、伏見の團扇に風匂ふ香堂前の粽、丸山かる焼、大佛餅、醍醐の
獨活芽、くらげの本芽漬は庭訓往來にいちゝるしく、東寺の蕪、壬
生の菜は名物運に鼻高く、その外名物奇製の品物數多ある都に、た
ま／＼入り込んだ兩人の騒客彌次郎兵衛、北八は淀川の下り船に間
違ひして荷物を失ひ、五條新地の一杯機嫌で丸裸體となつた北八は
同行の彌次郎兵衛が木綿合羽を借着して、ウカ／＼と新地戻りの朝
風身に泌み渡り、五條の橋に差し掛ると、此處はそのむかし牛若丸

が千人斬りをしたる處と聞き、北八、

かゝる身は牛若丸の裸體にて辨慶縞の布子こひしき

斯くして東に渡りて河原院の舊跡、門出八幡の前を素通りして、

高瀬船が綱に引かれて辿りながら行く道すがら北「ア、思へばく

詰らねえ事になつた、何うぞ古着屋でも見付けたら何んなでも綿入

が一枚欲しい、彌次さん宜い智恵はねえか」

彌「ナニ買はずとも宜い、江戸ッ兒の拔參りに裸體になつて歸るは當然だ」

北「其れだつて寒くてならねえ」

彌「そんなら幸ひ此處に湯屋がある、ナンと一寸くり暖まつて行か

ねえか」

北「ホンに此奴は奇妙く、彌次さんお先さへ有難てえ」一目散に

その前にある格子造りの暖簾を潜つてズツと駆け込み、裸體になら

うとすると其處の亭主 亭「モシくお前さんは何んぢや、何をす

のぢや〜」

答められて北八は四邊を見ると湯屋ではない 北「エ、忌々しい湯屋かと思つた」

亭「ハ、、、宅の暖簾にゆの字があるからそれで洗湯かと思つたの

ぢやナ、アリア濟生湯と云ふ振出し薬の名ぢや」

彌「ホンにこいつア大笑ひだ」

北「今ので又一倍寒くなつた忌々しい」

小言を云ひながら行く向ふに小さな古着屋がある、店先きに古布子古裕なぞが吊してあるから、北八は彌次郎兵衛に云ふて布子を一枚買はんど、彼の店先きに立つていろくとひねくり廻し、紺の布子を取つて透し見ながら、

北「モシ〜この布子は幾何だね」

亭「ハイ〜マア此方へお掛けなさいまし、コレお茶を持って来いお煙草の火も無いぞ、赤いのを一つ早く持つて来い」

北「イヤ茶も煙草も要りません、こりア幾何だと云つてるのだ」

亭「ハイ〜そりアお丈夫でございます、お安くして差しあげま

す」

小僧「ハイお茶を一つお飲りなさいまし」

亭「長吉、そりア微温いちアないか、何故熱いお茶をあげない」

小「イヤお内儀さんが宅は朝が茶粥ぢやから、お茶を沸かすなと仰います、それは昨日沸した儘のお茶でございます」

亭「如何様昨日のお養花ほどあつて頓と河童の尻の様だ、イヤ尻の序でに尾籠ながら御亭主さん、雪隠を一寸と……」

亭「ハイ〜雪隠へお出でか」

小「雪隠は微温うございませぬ、能く沸いてあります」キナニ雪隠を誰れが沸した」

小「今の先き私しが参りましたから、行つて御覽じませボツ〜と煙が出てありませう」

北「エ、汚ない事を云ふ奴ぢや」

北「其んな事よりこの布子は幾何だい、早く定めて呉んねえ寒くて堪へられぬ」

亭「お寒くばモツと此方へお寄りなさいまし、そんなに能う日が差してあります、昨日も着物を買ひにお出でたお方が、こりア大變腹かい宅ぢやと被仰つて、そこで一日日向暖りをして歸られましたがお方が着物を買ふて着なくても宜い、毎日此處の宅へ日向暖りに來ると、斯んなに云つて居られました」

北「エ、焦氣てえ、こりア賣らねえのか何うちやナ」亭「ハイ〜〜期うつと」

北「サア安くして呉んねえ」

亭「その紺の布子ぢやナ」算盤バチ〜」亭「三十五匁でトン〜もギリ〜でございます」

北「高い〜、俺らは江戸の者だが古着は商賣柄で幾何も取扱つて居るから能く知つて居る、本當の處を云ひなせえ」

亭「ハテ御商賣柄と云ふとお前さんも古着屋をしておいでになりませうか」北「イヤ私ちは質屋だ」

亭「質といふと何んでございますか、質をお取りなさるのか又置く〜」

のでございませうか』

彌「質か、質は置くのが此の男の商賣だ」北「それだから質に置く時の算用からして掛らねばならねえ、この布子は何うしても一貫より餘計にア貸すめエから、二朱ばかりに買やア損が行く』

亭「何を被仰います、後家の質屋へ持つて行つても一歩は物を云はないで貸して呉れます』

北「飛んだ事を云ふ、何うして一歩なんて貸すものか」亭「ナニ一歩なら大丈夫貸します』

北「それともお前エ直ぐに受けるか」
亭「受けますとも』

北「そう云つても當にアならねえ、それよりか先日の股引の出入りは何うなさる、そして裕の時貸しもあるし、それもお前エ子供衆が脾胃虚して病氣つている上、内儀さんが疫病で死なれたけれど、佛を抱へて葬禮を出す工面が出来ぬと強ての頼み故貸してあげたものを、義理の悪い、寧ろの事この布子とその裕の抵當にたい取つて償きませう』

亭「ア、モン、途方もない怪しからん事を被仰しやる、私しの嫌アは何時疫病で死んだ、馬鹿な事を云ふナ』

亭主は大きに腹を立てゝいる、彌次郎兵衛は可笑くおもひながら彌「何うも此の男は口が悪くてなりません、了簡しなせえ、そして

何かと面倒だから此の布子も一貫に負けて遣んなせえ』幸「イヤ宜うございます、朝商ひぢや負けてあげませう」ジャン／＼。

北「先づは布子に有りついた」

彌次郎兵衛に此の代金を拂はせ彼の綿子を着て、彌次郎兵衛に木綿合羽をかへし此家を出るとて暖簾を見れば虎屋とあるに思ひより、

和藤内三貫あまり古布子老一貫に求めこそすれ

其より北八は忽ちに元氣を得て、

北「何んと彌次さん、凄じからう、古着屋めをちやらばここで壹貫に見おとしは安い物じや、時に此邊は何と云ふ所だの強敵に絆な女が

ちら／＼するは」

彌「ハ、ア紫頭巾の野郎共と見へるから大方宮川町だらう」北「来るぞ」

美しい妓供が来る、能い時己等衣物を買つて宜かつた、萬更裸體の上に其の木綿合羽じやア摺れ違つても外聞が悪い」

ト俄に襟かき合せて通るに、向より来るおやま人行違ひに北八を見

て、
○「初音さん見なませ、彼の人さんの着物に大な紋が付てじやわいなヲホ、」

初「ホンニ阿呆らしい人さんじやヲ、好かんやのヲホ、」ト笑つて行き過ぐに彌次郎心付きて、

「フヤ、北八手前の着物を見や背中の横丁に大な紋所がくつ付
ていらア」

北「何處にく」ト見ればこの衣物のぼりを紺に染めたるものなれ
ば暗き所に知れねども日あたりよき所には大な紋所ありく」と見へ
るに 北「コリヤ大變く」

「ハハハ、裾の方には鯉の滝登りが見へるから、此奴職の古じや
な」

北「エ、古着屋奴が頼だ目に合はしやアがつた、道理で安いと思つ
た、打のめして來よふ」

「何に皆な手前が篋棒から起つた事だ」

北「忌々しい」

ト四條通りに出で有名なる狂言場に入りしにドサクサに木戸錢を棒
にせしかば、

木戸錢を棒に古手の布子にて芝居も紺のだいなしにせし

それより行きくして祇園の社に參る、御本社の中央は大政所午頭
天皇、東の間は八王子、西の間は稲田姫で、聖武天皇の御宇吉備大
臣唐土より歸朝の時、播磨の廣峰に垂跡したまふを崇め奉つたの
だと云ふ、其他攝社末社數多く、參詣人は群集して茶店も數多く、
祇園香煎の匂ひ高くして齒磨賣の居合拔き、賣藥の効能云ひ、浮世
物真似能狂言等境内せましと建ち並んでいる、彌次郎兵衛、北八の

兩人はこれを残らず巡拜して南の方の樓門を出ると二軒茶屋、これは豆腐田樂が名物で赤前垂をした女が大勢門に立つて喋舌つてい

る。女「お休みなさい〜、此處へお這入りなさいまし、貴郎お支度をなさいませんか」

男「ハ、ア此處が川柳點に豆腐切る顔に祇園の人だからと云つてある處だナ、ア北八見ろ、こいつは妙だ〜」

内裡を覗いて見ると女が豆腐を切る音面白く、トント、トント

〜。北「ホンに面白い、イヤ時に此處で一杯やらかしては何うだ、サト

腹が北山の御神木だ」

北「サア奥へお這入りなさまし」兩人は案内に連れて奥へ通つて来る。

女「お茶を一つ」北「ハイ〜、エ、田樂で飯に仕様酒も少し……」

女「ハイ畏まりました」

男「京では何んでも他國の者を見ると途方もなく高く取ると云ふ事だから油断はならぬ」

北「ホンニ其れ〜三文でも割を食つちやア強腹だ」トこの内酒と口取にひたし井と出づ。

女「一つ上りなされ」

彌「よし／＼モシ女中酒は幾錢だの」

女「ハイ／＼私所の御酒は宜ござります六十匁かへで御座ります
どいな」

女「エ、其りや悪かねへ、此のどんぶりは幾錢」女「其れかひは五匁
で御座りますわいな」

北「飯を早く頼みます」

女「ハイ／＼畏まりました」間もなく膳を二つと飯櫃に田樂を持つ
て来る 女「ハイおでんが出来ました」

彌「こいつは變な田樂だ」女「それは萬引で、お味噌の方は今出来ま
す」

彌「田樂は幾何づゝだ」

北「ハ、如何に先きに價を聞くが宜いたつて、田樂の價迄で聞
かないでも宜いちアねえか、サア一杯始めねえ」

彌「オットット／＼なる程宜い酒だ、水つぼくてネツカラ飲めぬ、
モウ一杯續け様」

北「コレお前え小言を云ひながら一人で飲んでいる、些と此方へ寄
越しねえナ」

彌「時にこれでは不可ぬ、モシ／＼何か肴を一つ」女「ハイ／＼」聽
てそれへ肴を持つて来た。

彌「此の井は幾錢だ」

女「ハイ二匁五分でございます」

北「こいつは高エ〜」

彌「エ、打捨つて置け、餘まり方外な事をすると俺が困らして遣る事がある」次第に肴を出して来る、其の度毎にその値段を聞いて出す丈けの物はス〜カリ食つて仕舞つた。

彌「ドレ〜北八見やザツトした所が此書付だ」

北「ヲヤ〜拾貳匁五分だ強勢高へ〜二朱位の物だ、彌次さん負て貰ひなせへ」

彌「イ、ヤ安い物だ、其れ釣を持つてきなサア〜北八荷物が出来た、是を皆持つて歸るのだせ」

硯蓋大平「こんぶりなどの器物を鼻紙にふき掛る故 北「彌次さん其れを何うする」

彌「コレ女中コリヤ皆持つて歸りやすぞ」

女「イエ夫は」

彌「ハテ先刻に此の井は幾錢だと聞いたたら五匁だと云ふたじやねへか、而して硯ぶたはと云へば二匁五分だと云ふよしが大平が三匁よしか此鉢はと聞いたたら是れが三匁五分と貴様が云つたに違ひはあるめへ、底でべた所が十二匁五分渡したから言分はあるめへ」

女「ヲホ、能うせやろ〜とてんごう云ふお方じやわいなヲホ、」

男「イヤホ、じやアねへ本當に持つて歸る」

ト眞面目になつて包みに掛る故女は大に驚き、女「モシナ私しの云ふたはお肴の事で御座りますわいな」

男「ハテ肴の直段聞く氣ならこの硯蓋に盛つてある肴は幾錢だと聞きます、それを此の硯蓋はと云つたら二匁五分だと云つたぢやねえか」

女「それだつてそれがマア……」

男「ナニ争論があるものか」

返答をして愚圖く云つてゐる處へ、委細の話しを聞いて勝手の方から出て来た前垂掛けの男、男「ハイこれは貴郎の方が御道理でござ

ざいます、何うぞお持ちなさいまし、その代り道具の代物は戴きました、召食つた物のお金はまだ戴いて居りませんから、それを何うか御勘定なして下さいまし」

男「成程く、そりア然うだ、食つた物は高が知れてをる、拂ひませう幾錢だ」

男「ハイ、エ、七十八匁五分でございます」

男「ナニ七十八匁五分、途方もねえ事を云ふ、俺等を盲目だと思ふか、コレ唯た五百か六百の物を食はせて置いて、大それた事を吐しアがる」

男「イヤ私し方では何でもお肴は大阪の方から徒歩荷下取り寄せま

すから、その駄賃が大變に掛ります」

彌「肴はそれにもして遣らうが、青物は高が知れてある、アノ始めに出した菜の浸し物は幾干に付くか」

男「ハイ彼はな七匁五分」

彌「ヤア彼れが七匁五分だア、餘り人を馬鹿にしやアがる三文か四文が物だ」

男「其様に仰しやりますな、ありや京の名物で東寺菜と申しますわいな。私し方では別に作らせまして、虫の喰菜は除けますわい、而して莖も太い細いのない様に出して上げるわいな、穢いお話だが糞も絹ごしにして掛けますわいな」

彌「頼だ事を云ふ其んな事がある物か、何でも食つた物の代は二朱計り遣らふ」

男「イエ、左様じやありませんわいな、ハテ高いとお思召すなら上つた物を残らすお戻し下さりませ」ト此一口に彌次郎理屈攻に大に閉口してまじくする。

北「エ、面倒な彌次さん始まらねへせ」

彌「忌々しい云分が有れど勘定づくで恰好が悪い了簡してやろう、能く覺へて居やアがれ」トにらみ廻して此所をホウ／＼に出れば女よふお出て又お近い内にとおくり出る。

彌「くそを食ひハ、ハ」

又しても祇園の茶屋に田樂の味噌をつけたる身こそ口惜しき

京の三條で梯子の珍談

其より境内を出で元の四條通りを行くに日も早七ツ下となれば、
急ぎ三條に宿を求め足休めんと辿り行く先に立ちて近在の女商人
何れも頭に柴薪或は梯子連木などを頂きて四五人打連れ立ちて賣
歩く。

北「コウ見ねへ、強勢な物を頭へ載けて行くは」

西「アノ又尻を振るさまはハ、」

女商人「薪買はしやせんかいナやア」ト行々河原に出ると女共荷を

下して煙草休み。

西「アハ、流石は都じゃ、何奴も小奇麗な面付じやチト冷かして
遣らふか」

北「又お前回まされ様と思つて」

彌「馬鹿ア云ふな、手前じや有るめへし」ト煙管を出し女の脇へよ

り「彌御無心ながら火を一ツバツバくく。時にお前方飛んだ重
い物を好く頭へ置いて歩くさなさるの」

女「左様じゃわいな」

彌「此位なもの己なんざ二十貫目や三十貫目ある石を頭で振り廻し
た物だ」

女「お前さん方は饅餚屋の粉引じやあるまいな」男「エ、手前だまつて居ろい」

男「お前さん方何卒此の播木を買ふて下さいまし」

男「サテ播木が、ア、買ひてエがこりア細い、私ちらが處ぢア何んでも材木の様な、そして四角な播木でなくチア間に合はねえ 女「オホ、、、四角な播木で味噌をするのなら、大方摺鉢も四角でございませう」

男「然うともく、俺らが處ぢア穴藏で味噌を摺る」

女「オホ、、、氣樂な面白いお方ぢや、アノ播木がお厭やなら階子を買ふて下さいまし」

男「ハ、、、階子か面白い、幾錢だ」

女「今日は何も能う買りませんから、安うしてあげましよう、下さいますし」

男「高いく、二百ばかりなら引受け様」

女「そんな事を被仰るものではございません、モウ些と買つて下さいまし」

男「否やだく」女「お前さん斯んなに組合が宜うしてあります、では五匁であげませうか」

男「否やく」女「宜敷うございます、これを持つて歸つたら叱られます故、二百に負けてあげませう」

彌「やア負けるか、情けない事を云ふ」女「大變にお安い物でござい
ます」

彌「幾程安くつても階子を買つて何うするものか、家もねえ癖に……」

女「宜うございます、サアお持ち下さいますし」

彌「此奴ツは詫つた、實は俺等は旅の者で今夜は三條へ泊らうと云
ふのだから、階子を買つても仕方がねえ」

女「何を被仰います、不用な物に價を付ける事はございませぬ」

彌「其りアモウ價は付けたが不用だから、これが要らねえ物でも袂
が懐中へでも這入るものだつたら買つても遣らうが、何を云つても

此の大きな階子だから恐れ入る」

女「そんならお前さん妾しを黽つたのか、此方は商賣ぢや何うでも
持つて行つて貰はねばなりません」

女共四五人で口喧ましく喋舌り立て、彌次郎兵衛を中に取り巻い
て攻め立てる。

總べて此の女商人は皆至つて氣の強いもので、却々承知をしない
其のうち物見高いは都の常、何事ならんとワイ〜云ひながらこれ
を見物せんと、兩人をグルリと取り巻いたから今更ら逃げられない
大きに困り果て、様々と詫言を言つたり又威嚇しを云つて見ても聞
き入れない、殊に相手は皆女の事であるから喧嘩をすると云ふ譯に

も行かず、仕方なく錢を二百文出して漸やく階子を買ひ取る事になると、見物はドツと笑ひながら四方へ別れて行く、ところが何しろ人通りの多い處であるから、此の儘で階子を捨て、置くと云ふ譯にもならない。

北「こいつは意氣地のねえ目に遭つた、北八、其處等まで擔いで呉れ」

北「エ、飛んだ事を云ふ、お前エ持ちなせえ」又「一番回んだ剛腹な」

如何にせん階子の親とこの様な厄介ものを引受けし身は斯くて四條通りを寺町へ下りて行く道々も階子を持ちあぐみ、ブ

ツツ云ひながら「何んと北八、手前エ交誼を知らねえものだ、些とばかり持つて呉れろ」

北「いかにもお前エの心柄とは云ひながら氣の毒な事だ、嘸重からう、斯うしなせえ、アノ女共の様に頭へ載せて持つて見なせえ」

彌「成る程」

手拭を疊んで頭の上に載せ、其上へ階子をのせて兩手で持ち添へて行くと往來の人「甲」こりア何ぢア、危なくてならんぞ」

彌「ハイ、向ふが薩張り見へねえから歩行れぬ」

乙「こりア火事があるんだナ、早く水を持って来い」丙「エ、何處に火事がある」

乙「アレ那處へ階子を持つて行く奴ッがある、阿房く」
「何を吐かしアがる」

乙「間拔な奴だハ、ハ、ハ」

「イヤこの篋棒奴等ッ」階子を頭へ載せた儘でグツと振り返ると階子の前後で往來の人の頭へコツ、リア。〇「痛い〜〜」。何だ途方もない、此の人中で長い物を横倒しにしやアがつて馬鹿な奴ッだナ、横ツ面ア擲つて遣らうか」

「ナニ痴言吐かしアがる」

△「私の前額の痰瘤が無くなつた、其處等に落ちて居ないか見て呉れ〜」

「エ、俺等がそんな事を知るものか篋棒奴ッ」

△「甚い顔面だナ、殺んで仕舞へッ」

何れも負けぬ氣の男と見へ、大勢ドヤ〜と立ち掛らうとするから、北八は中に這入つてこれを押し止め、北「こりア此方が悪るかつた、誰方も御了簡下さいませ、サア〜彌次さん行きなせえ」

「忌々しい奴等だ、北八、何うも一人では持たれぬ、後の方へ肩を入れて呉れぬか」

北「ドレ〜こりア俺までを飛んだ目に遣はせる」

是れも又嘶しの種よ遙々と京へのぼりし階子一脚

「エ、歌どころちアねえ、此處かへ打捨つて仕舞ひ度エものだ」

が

今は二百の鏡も惜しいとも思はない、厄介者、階子であるから何處へ捨て、置かうかと思ひながら、往來の少ない横町へ這入つて密と捨て置かうとしたが、折悪しく人に見附けられて咎められ、仕方なく擔ぎ歩いて又何處かへ捨て様〜と思つてゐるうち、ツイウカ〜と三條通りへ出て來ると宿引と見へる男。

男「モンお前さん方お泊りぢアございませんか」

男「泊る〜」

男「何うぞお越し下さいまし、御案内をいたします」

男「お前エ何處だ」

男「ツイあこじやわいな、サア〜お出んかいなく〜」ト打ち連れ、大橋の方へ行く。

頓だ芝居

既に其日も早や西に落ちて家ごとに燈火を輝す頃三條小橋を打渡りて彼の旅籠屋の方に着きたるに、

宿引「サア〜お泊り様じやわいな」

男「コレハお早ふお着きで御座りますわいな」彌「アイお世話になりやす」

男「お荷物は」北「此楷子一丁」

亭「コレハ氣疎いお荷物じやわいな、コレ〜お蛸や奥へ御案内申さんかい」

女「ハイ〜お出なされませ」

ト二人奥へ入る、亭主入り來りて 亭「今夜はお客様がお少なう御座りますさかい、お湯は焚きませぬ、ツイ後の小橋下る所に奇麗な湯が御座りますさかいお出で下され」

北「おらア宜いから、彌次さんお前行くなら往つて來なせい、京の水で洗ふと強勢に色が白くなると云ふ事だせ」

彌「此上白くなつては詰らねえから止しませう」亭「時に貴郎方はこの近在からお越しでございますか」

北「イヤ私ち等ア江戸でございます」

亭「へエ、私しは又階子などをお持ちになりましたから、こりア近在のお方でお家へ持つてお歸りなさるのかと存じましたが、そして江戸のお方が又階子杯を何んとなさいますので」

北「イヤこれには少し譯があります、那らア江戸から托かつて來ましたのサ」

亭「そりア何んとして那んな大きなものを」

北「聞きなせえ、私ちが懸念な者だが生れは此の京の人で、今江戸で世帯を持つて居ります、ところへ京の親元の方から遙々とア階子を持たせて江戸へ寄越しました、その譯はその親御が無筆といふ

事で人に手紙を書いて貰ふのも面目ねえと云ふのからして、アノ階子ばかりを寄越したので、それは一度登つて来いと云ふ心意氣でございませう、そこで其又息子が返事を寄越してえが同じくこれも無筆でいろはのいの字も書けねえ癖に飛んだ負け惜み、私たちが今度御當地へ来ると云つたら、幸ひの事だから寄托けてえ物があるといふに仍つて、随分何んでも届けて遣らうと云ひましたら、聞きなせえ汚ねえ乞食坊主を一人と、アノ階子を寄越してこれを親父の方へ届けて呉れると云ひます、そこで私たちがこりア階子は宜いが、坊主は生きている人だから持つて行くに難義だと云ひますと、その男の云ふにはそんなら階子ばかりを持つて京へ行つたなら、何うぞ坊主

を一人頼んでその坊様に撞木ばかり持たせて、階子と一緒に親父の處へ遣つて下さいと云ひますから、そりア又何故にそんな事をするのだと聞きますと、イヤ京の親父から登つて来いと云つて寄越したので、その返事だと云つて頼まれて持つて来ましたのサ」

亭「ハ、ハ、階子をやつて登れと云ふのは判りましたが、その返事に階子と又坊様に撞木ばかり持たして遣ると云ふのは何う云ふ譯でございませう」

北「そりア登り度いが金がないと云ふ心だ」

亭「ハ、ハ、出来ました、しかし遙々の道中で階子の事なら柳行幸へも遣入りますまいに、嘸御難義でございませうたらう」

北「イヤ却々そうではございませぬ、道中をするには階子を持つて歩行くが飛んだ重寶な物だ、馬などに乗るには階子を掛けて乗る途方もねえ乗り好くつて、そして川を越すのに得な事があります、大井川でも阿部川でも臺越しと云ふ事をする、川越の人足が四人前に臺の賃が又一人前出ます、處を階子持参といふものだから川越しの賃錢ばかりで臺の賃がなくなります、お前方もこれからしも中をしなざる事がありア、必らず階子をお持ちなさるが宜い、こりア人の氣の注かねえ重寶なものでございませぬ」

亭「イヤ誰れも道中するどてナニ階子を持つて行かうと氣が注ぐ人はございませぬハ、ハ、ハ、時に只今被仰つた坊様は此處でお雇ひな

さいますか」

北「そうサ、是非雇はねばなりません」

亭「左様なら幸ひの事があります、私し方に今世話をして居る宜い坊様がございますから、これをお連れなさいまし、只今お紹介せしませうか」

立ち掛らうとするから、北八膽を潰し 北「モシ」待つてお呉んなせえ、今急には要りませぬ、厄介物の階子を引受けてさへ斯んなに困っているのに、又生きた坊様なぞを取り込んで何うするものかノウ彌次さん」

彌「イヤ」其りア手前えの掛りだから俺は知らぬが、何んしろき

の坊様を早く願むが宜さそうなものだ』北「エ、お前え迄が飛んだ事を云ふ」

亭「ハテ今貴郎の云はれる通りなら、是非共お頼みなさるのではございませんか、それなら早い方が……」

北「それは然うだけれども」

亭「何んでも萬事私しにお任せなさい」北「そんな事より俺ア早く飯が食ひてえ」

亭「ハイ、御飯も今あげますが、坊様は何うちや」北「オ、サ坊様も早く喰ひてえ、腹が空つて堪へられぬ」

亭「ハイ、畏まりました」勝手へ立つて行くと間もなく女が飯を

持つて来る、臆し食事も終り膳を引くと、宿の亭主は北八の冗談口に乘せられた様な顔をして意地わるう、これも洒落者と見へて六十七位の汚ない、髯だらけの大坊主を一人それへ連れて来た

亭「イヤモウお食りになりましたか、時に只今お話し申しましたは此の坊様でございます」

紹介せるとこの坊主、梅毒か何かで鼻を落したと見へ、鼻は潰落げて鼻聲だ。

坊「ハイこれはひようお泊りなはれました、愚僧名は九哲と申します、此の旦那がお話しゆへ参りました」

北「これは御苦勞、サア、此方へ、これは御亭主さん段をお

世話になりましたが、一つお氣の毒な事があります」亭「へエお氣の毒で、何んでございます」

北「イヤ失禮ながらアノお方では間に合ひますめえ、何故と云ふに些と素人狂言でもしたと云ふ様な坊さんでなけりアなりません」亭「それは又何うして」

北「イヤ先刻もお話し申した通り、先きの親元へ行つて登りてエが金がねえと返事をした上で、彼の息子が三百兩なけりア登れねえといふものだから、その心意氣をせなくチアなりません、處でアノ盛衰記の梅ヶ枝が無間の鐘の所作事、撞木を柄杓とこじつけてチ、ンチン、ア、三百兩の金が欲しいなアなぞと其の坊さんにやらかし

て貰はなきアならぬと云ふのだから難かしい」

亭「イヤ宜うございます、この坊様も實は馬鹿村變之助と申して、以前は宮芝居の女形をやつて居た人だから、甚い大出来だ、幸ひ宅の娘が今無間の鐘の處を習つていますから、何も慰みに淨瑠璃を譲らしてやらして見ませうか」

丸「ひやりましたよともく、私が梅ヶ枝をひやるから、誰方を源太をやつて下さい」

北「こりア面白い、鼻くたの梅ヶ枝に北八、源太は手前が相當だ」

北「エ、馬鹿ア云ひなせえ、悪い洒落だ」

真面目になつて小言を云つている内、亭主の指圖と見へて十三四

の娘が三味線を抱へて來ると、次の間には女房女中下男迄が圓くかたまつて、丸哲坊をそののかしながら見物している、彌次郎兵衛可笑く思つて笑ひながら、

北「コレ北八、アノ通り内儀さんや女中達までが見物をしているが手前エ一番落ちを取る氣はねえか何うだ」袖を引かれて北八も少し浮き立つた。

北「いかさま見物が多いと張り合ひがある、まゝよ俺が源太をやらう、その代り云ひ草は出鱈目にやるが宜いか」

丸「宜ござりますす〜、サア〜お寅さん、源太の出端からやつて下さい」

北「い、い、い、髭無者苦者の梅ヶ枝も宜いが、源太が幟りを染め返した着物を着ているのも珍らしい」

北「コレ〜東西〜」

スルと娘は淨瑠璃を語り出した、淨「夜ごと〜に通ひ來る梶原源太景季、千歳が奥を窺へば丁度宜い首尾幸ひと、ズツと通れば梅ヶ枝は、炬燵にどんと身をそむけ、そらさぬ顔でふしきせる」

北「コレ何が機嫌にいらぬやら、めつきりと持たせぶり、われらが様な浪人の徹た襟には付かれまい」

淨「ズンと立つを待たんしやんせ」

丸「座敷ばかりを勤める客で、今日こゝへ貰はれたは文で知らせて

合點じやないか』淨』にくひ男と目にもろき涙は戀のならばせなり』

北「ア、コリヤ寄るなく、臭くてならねえ、其方へグツと寄つた

く、剛勢に臭い梅ケ枝だぞ』

丸「其りや聞へまへぬ源太さん』

北「エ、寄るなど云ふにこ、ア手短かにやつて呉れ、コリヤ坊主、

イヤ梅ケ枝産衣の鐘は何うして』丸「ひちなん即滅と三百目にまげた

わいの』

北「ナニ打ち殺した、そりや何故に』

丸「そもや私しが横寝から骨痛になつて山歸來、飲むほどにく、

腫物はジク〜この鼻を助けたいばつかしに金ならたつた三百目で

ひくひ鼻を落すか、ア、鼻が惜しいなア』

三下りの歌 展「二八十六でふみつけられて、二九の十八でツイ其

の心、四五の二十なら一期で一度わしや帯解かぬ』

丸「エ、何んぢやな、人の心も知らずに歌いくさる、ほんに其れ

よ』

彌「イヤ待つた〜』

何思つたか彌次郎兵衛、店の方に出て行つたかと思ふと、以前の

階子を提げて来て鴨居に掛け二階の氣取りで彌次郎兵衛その階子の

中段にのぼりながら、手拭を疊んで大盃風に一寸と頭へ載せ 彌「サ

ア〜源太の母の安壽の役だ、サア和尚やらかしねえ』

丸「傳へ聞く無間の鐘をつけば有徳自在心のまゝ、これより小夜の
中山へ遙かの途は隔たれど、思ひつめたる吾が念力、この洗手鉢を
鐘どなぞらへ、石にもせよ鐘にもへよ心さす處は無間の鐘……」煙
管を取つて身振りをする、此の時彌次郎兵衛は階子の上から懐中の
小錢を取り出して、バラ／＼と投げ出しながら、自分で淨瑠璃を語
る。

彌「其の金此處にと三百文、錢入の錢投げ出す、深山おろしに山吹
の花吹き散らすやうにはあらで」

丸「こゝに三文彼處に五文、拾ひ集めて三百銅、こりア雇はれの賃
錢先き取りとは有難い」

搔き寄せて袂に入れ様とするから彌次郎兵衛驚いて、楷子の上から
丸哲を捉へ、

彌「そりア遣るのぢやねえ、俺の金だ」

引奪らうとすると、丸哲は又引奪られまいとする、その途端、鴨
居に掛けた楷子が外れて彌次郎兵衛顛轉返りドタ／＼落ちると楷子
は丸哲の上へ倒れ掛り、娘も脾腹を打たれてワツと泣き出す大騒動
彌次郎兵衛は腰を撫さすりながら、

彌「アツ痛ツ」

丸「ア、ウム」

皆「何うした」家内中狼狽へ騒いで一度に立ち上る拍子に、煙

草盆を跳散らすやら行燈を打ち損すやら、座敷はたゞ眞暗となつて泣くやら喚くやらの大混亂、亭主は漸くの事に燈火を持つて来る。

亭「ア、こりア娘は何うだ、オイ梅ケ枝が可訝な目をしているぞ、コレ／＼氣を確かに持て」

丸「ア、／＼苦しい、私ア吃驚りしてハツと思つたら、翠丸が上方へ吊つたわい、アイタ、／＼」

團「そりア困つたものだ、モシ／＼御亭主さん、梅ケ枝が翠丸を吊しあげました」

北「翠丸のあがつたのには宜い事がある、先刻見れア此處の店に錢膏藥といふ看板が見へたが、それを首の後邊へ貼ると金がさがる」

亭「何を被仰る、錢膏藥を首筋へ貼つたつて、何が下るものか」

丸「ハテ下る理屈だ、何故と云ひなせえ、錢があがれば金がさがる」

亭「エ、何んの事だ」

丸「ア、私ア何うやら宜い様ぢやが、お嬢さんは何うぢやいな」

女房「これ誰れでも一走り寸伯さんへ行つて来てお呉れ」丸「私アモウ宜くなつたから、お醫者さんと呼んで來まへう、そのかはりお寺へは誰など他の者を遣つて下さい」

亭「エ、何を吐シアがる」

北「ホンにお氣の毒な事だ、娘御は何處をお打ちなすつた」亭「脾腹

甚う打つたと見へて、大變痛がつて居ります」

彌「イタイわれらは都の生れ、人に擲さんひよんな目に遣はれてお笑止千萬な事だ」

亭「オヤお前人の娘に怪我をさせて置きながら、口合どころぢアあるよ」

彌「ハ、ハ、ハ、人の娘に怪我させたとは私や何うやら耻かしい」亭「イヤ笑ひどころか總體お前さん等は可訝いせ」

彌「可訝いとは何が可訝い」

亭「何がなんて筈棒奴、能く思つて見ろ、私ア此の年迄宿屋を永年して居るが、ツイに階子を持つて来た客を泊めた事はない、一體遠

國の人が何をするので階子を持つて歩行のやら、此方ア頓と譯が判らない、モシも屋根から這入り込む奴ぢアないかと家内の者もズツ言つていたが、成る程それ位ひな事は仕兼ねん人らしい」亭主は躍氣となつて高聲に怒鳴つている、處が彌次郎兵衛は例の怒りつばい方であるから、此の亭主の言葉がグツと癢に觸つた。

彌「イヤお前え可訝な事を云ふナ、私ちらア白正確のお旅人様だ妙にひねくつた事を云ふと承知しねえぞ」

亭「オ、云つたが何うした、何を云つたつてお前さん達が階子などを持つて来るから起つた事だ」

女「貴郎、そんな人に介意すと此方へ来て下さい、娘がアレノ妙

な目附をしていませう」涙ぐみて騒ぐから亭主もウロ／＼して亭「コレ見ろ、萬一も娘が此の儘で死んだらお前さんは下手人だから然う思つて居れ」

女「アレ／＼正氣がない」

亭「こりア目を眩したのだ、ヤアイお寅やアイ／＼」

女「お寅やアイ／＼」

夫婦は娘を抱いて水よ氣付けよと騒ぎ立て、ワイ／＼泣き出したのを見て彌次郎兵衛も狼狽へ始めた。

彌「エ、コリヤ北八、何うしたものだらう、俺アモウ此處にア居られねえ、こりアお寅、死んで呉れるなよ、何うぢや／＼」

女「お寅イのふう」

亭「お寅やアイツ」

彌「エ、情けねえ、こりア堪らん／＼」ウロ／＼して立ち騒ぐと亭主「亭、こりアお前何處へも行く事ア出来ないぞ」

彌「ハイ／＼何處へも行きはいたしませぬ、コリヤ／＼北八全體手前えが悪い、何んの有體に言へば宜い物をチャラクラ嘘をついたから、起つて無間の鐘だの何のと六でもねへ事を始めたから此の騒ぎに成つたもとは手前が發頭人だから、解死人は其方へ譲るぞ」北「ヲヤ、どんだ事を云ふ、當人はお前だつな」

彌「そんなら拳をして負けた方が解死人だ」

北「馬鹿言ひなせへ、己等ア知らぬく」

ト此内醫者も來り藥を吞ませるに、娘は呼吸吹き返す、皆安心して悦ぶ、彌次郎も此上は謝るにしかすと、北八を以て段々どわびを入れて此の争を納め、證文一通を入れる、北八しかつめらして印をして認めたる證文。

一 札の事

一 我等此度ひらがな盛衰記淨瑠璃の内安壽の役相勤め候 處實正也然る所梅ヶ枝無間之鐘相撞候節其金是に罷在趣申打替の鳥目投出し候逆梯子爲之候故九哲どの陰裏御釣上被成並に貴殿息女に怪我爲致候段全右梯子鴨居へ打掛候より事起り候趣預御

立腹無申 譯段々詫入候處御了簡被下 忝なく存候然る上者

已來御宿御無心申候共梯子杯決而持參致間敷候爲後日仍而如件

月 日

當人 彌次郎兵衛

證人 北 八

此證文にて事おさまり、宿の娘も次第に快く、中直りの酒汲み交して夜も更ければ二人はやがて打伏したるに、程なく夜明けて家内の人々起立ちたる物音に目を覺し、仕度調へ忽に立出づると

彌コレハ大きにお世話になりやして、殊に色々な事で御氣の毒

亭「御機嫌宜うお出でなされ」ト二人は此家を出る。

北「何ト今日は何所の方へ行くのじや」

彌「イヤまだ東山に見物し度い所があるが、マア今日は北野の天神様へ行きやせう」ト段々で行つて堀川通に出づ。

北「時に思ひ出した事がある、ソレ伊勢の古市の女郎屋で京の人と一座したが、慥かに其の人は千本通り中立賣とやら云つて、北野の天神様へ行く道だと云つて居たぢやねえか」

彌「オ、そうく、邊栗屋の與太九郎か」

北「ソレく其奴ツの處へ尋ねて行つて酒でも飲んで遣らうぢやねえか」

彌「ナニ那奴が飲ませるものか」

北「どころを俺が術をもつて飲み倒して遣らう」尋ねながら中立賣に來て邊栗屋與太九郎と云ふ男の宅へ訪ね當て、階子を軒に立て掛けて彌次郎兵衛、

彌「御免なせえ」

と格子戸をガラリ開けて這入ると與太九郎 興「誰れだ、オ、こりア珍らしい、能うお登りになつた」

彌「扱てマア伊勢では大きにお世話になりました」興「何をそんなにお互ひだ、サア此方へお這入り」

北「ハイお久しうございます」

與「イヤこれは、まだ戸外にお連れ様があるのか」北「イヤ兩人ばかりで誰れも居りません」

與「それでも那りア何だ」

彌「階子の事か」

與「何んちや階子を持つて来た……こりア妙だ」北「イヤお前の家は中立賣をヒヨイと上つた所だと云ひなすつたから、もしも高い所なら階子掛けて登らふと思つて態々もどめて持參致しました」

與「ハ、コリヤお互ひじやわいな、時に何もお愛想がない、お仕度は何うじやいな」

彌「アイ今朝宿で食べたまゝ、中食は未だ致しやせん」

與「ソリヤお楽しみじやわいな、酒など上げ度いが、此邊に酒屋はなし」

北「酒屋は直きお隣に有るじやわねへか」

與「アイ彼處では小賣は致しませんわいな、折角のお出お煙草でも上りなされ」

北「煙草は此方のだから勝手に致しやせう」

與「お前方せめて最少と先へ寄つてお出でなさると」話ばかりで何も出さぬ故、北八堪へかね密と抜け出て隣の酒屋へ飲みに行く、話に無中になりて與太郎は北八の逃げたるを知らず、與「イヤ最一人の御方は」

「もふ歸りやした」

奥「はて扱て根から知らなんだわいな、何時の間に行んで、あつたぞいな」

奥「今御馳走の出掛けた話の中に」奥「ソリヤ残り多い、後段にまだお菓子のお話致そうもの」

奥「イヤもふ先程から大分御馳走になりませぬ、おかげで餓しい、お暇をいたしませう」

奥「イヤ一寸と待つて下さい、少しお話しがある、アノ伊勢の古市でお附合ひ申した時の事だが、アノ時の入用金は一兩であつたが、私ア算用違ひをして金壹分二朱此方から出して置いたので、これ見

なさい、道中の小遣帳に女郎屋の書附も何も彼も斯んなに細かに書き附けて置いたが、戻つて勘定をして見るとお前方お一人前百二十四文づゝ私の方へお貰ひ申さねば勘定が合はない、僅かな事だから何うなつても宜い様なものだが、勘定の事だからお二人分二百四十八文お貰ひ申しませう」

奥「エ、お前も今になつて汚ない事を云ふそればかりの事打捨つて置きなせえ、此方でも立換へた事があります」

奥「そりア上げるのがあれば上げますから云ふて下さい、算用は算用ぢや、マア此方へ取るのが此の通りだから斯うしませう、端錢を負けて二百文呉れなさい」

男「エ、外聞の悪い、其の時取れば宜いものを」小言の八百を云つたが、何うしても承知しない、彌次郎兵衛も面倒臭くなつて来たから、二百文出して遣ると」

奥「ハ、ハ、こりア有難い、これからお前方は天神様へ行くのだから、そしたら序でに平野様、金剛寺へ行くが宜い、遅くなるから早く行つて泊んなさい」

男「大きにお世話だ」

膨れ面をして表へ出ると、隣りの酒屋からニコニコもので出て来た北八 北「何うだ、御馳走があつたらう、忌々しい目に遭つた、何んの手前えが訪ねて寄らずとも宜いものを、錢二百たゞ取られた」

北「ハ、ハ、何うして……宜いワ、其の代りにアノ階子の厄介物を此處に捨て、置いて困らして遣んなせえ」

男「ナアニ困るものか、直きに賣つて錢にするワ、アノ野郎奴に階子迄たゞ取られて堪るものか、矢張り擔いで行かう」

それより道を尋ねながら行くど、間もなく北野天神の前に来た、こゝでは菜飯田樂を名物として、赤前垂の女が澤山戶外に出て客を呼んでいる。

女「貴郎お休みなさいまし、菜飯おでんおあがりなさいまし、お茶をお飲み」

男「モシ、ハ、俺ア天神様へ參詣して歸りにお前えの處で休ませませう」

から、此の階子を此處へ置いてお呉んなせえ」女「ハイ、お預かり申します、早く行つてお歸り」

「ちやお頼み申します」階子を茶店の門に立て掛けて置いて、尾早やに此處を歩き過ぎ、

「やレ、これで重荷もおろした、何んの歸りに寄るものか、なんと北八階子を捨てた智恵は何うだ」

北「ハ、ハ、面白くもねへ」

とそれより右近の馬場に至る、此の所には借馬多く人々出て馬の糞古をする、中々見物多し、北八之を見て、

北「おれも一鞍乗りてへな向ふに見て居る姉様に」ト人ごみの中に

女「づれが二三人見て居る後へ廻り見物し居る娘の尻をつめる、痛やの誰さんじやいな、コレお丸さん此方來てな」

女「何んじやいな」

「誰れじややら私がお尻をつめたわいな」

年増の女「ソリヤ女のない國で生れた人さんじやあるぞいな放て置か
んせ」

「エ、北八か悪い洒落をするなへ」

「ナ、己ら知らねエ」ト云へさま年増めつめてやろふと思ひ違ひ
背中の子をつめると子「ア、痛い」トわつと泣く。

年増の女「だれじやいな、悪い事さんすわいな」子「アノおちさんがつ

めたのじや」

玄エ、好かん人さんじやわいな」

無「堪忍しなせい、去りとは外聞の悪い男だ」ト足早に此所を過ぎ

てみなみの御門あり、人々天満宮の本社へ参る。

おまもりを首に掛けつゝ尊まん

さいふ(宰府)の宮をうつす神垣

北野天満宮

北野天満宮は往昔近江國比良の社の神主良種が神勅を蒙り、朝
日寺の僧最珍、右京の父子等と共に力を合せて靈祠を作り、天徳三

年右大臣師輔卿魏々たる大厦を改めて造營したのが今の北野宮で、
社頭には渡邊綱が納めたと云ひ傳へる石燈籠昔むしてあり。

綱の名はいまだに朽ちぬ石燈籠昔を今に三ツぼしの紋

東向觀音は梅櫻の二樹をもつて菅神御手づから刻ませ給ふ所な
りといへり。

御利益は四方にかほれる觀世音梅さくらにて作り給へば

それより社内を抜けて平野の神社へ參詣する、此の神は四座で、
今木神、久渡神、古開神、比叟神なり。

こゝろよく飯食ふ爲に本膳の平野の神を祈りこそせめ

爰に紙屋川のほとりに二軒茶屋あり、二人は空腹となりたるに支

度せんぞ此茶屋に這入れば女共出迎ひて 女「よふお出たわいな、ツイト奥へお出なされ……」

彌「なんぞ甘へ物があるかね、飯も食ひたし酒も呑みたし、マアちよびとした物で一杯早く頼みやすぞ」

と奥の椽先に腰を掛ける、其所へ京都の空也堂の坊主が二人這入つて来て、種々話の後ち彌次郎と飯の食べくらべをする、彌次郎食ひ負けて代金を拂はせられ、坊主二人はニコくして出で行く、北八之を見て 北「ハハ、いゝ見せものだ、サア彌次さん何ふたい往かねへか」

彌「ヲ、往きてへが餘り食ひ過ぎて動かれねへ、何卒手を引いてそ

ろく立たせてくれ……」

北「エ、いくちのねへ、サア立ちなせへ……」彌「コレサ手荒くして奥れるな、飯が口から出るよふだ」

北「テモきたねへことを云ふ、サアく立ちなく……」

といひつゝ彌次郎の手を取り引立つればやうく立ち上りて出か
けぬ。

女「おゆるりとお出なされ……」

北「アイ御世話になりやした、サアく彌次さんいかねへか、どふ
するく」

はじめから人を茶にして何ばいもやたらに飯を空也寺の僧

是より又天神の社内しやないに歸りたるが、東の門ひがしもんより一條通りどうどほに出づる道みちを知らずく、浮々と元來もとまきし南向の門みなみむけもんを出でたるに、思はず彼の階はし子を預けし茶屋の門かど近くなれば彌次郎やじらう心づきて、

彌次郎「待て、先刻さつきの階子が矢張彼處やっはりあそこに立掛けてある、エ、此方こつちの方へ來こなんだら宜よかつた物を、北八きたやち又後へ戻もどろふか」

北八「成程彼處へ休まずに直通りすまほにしたらひよつと見付けた時例ときれいの階子持こもつて行けと云ふだらうし、といつて又跡へ戻もどるも強腹がうはらだ、何卒どうぞ宜いい智恵ちえがありそふな物だ」

と立上りしあんの所へ右近の馬場の借馬しやくば一疋馬喰びきくらしふが引いて來るを見るより、北八「イヤア好いい事があるぞく、アノ馬の横腹よこはらの方はうにくつ付つ

いて茶屋の前を通れば馬の蔭かげになつて居るからよもや見付みつけは仕舞しめえじやねへか」

彌次郎「ア、サ其れが宜いい、コリヤ大出來おほいでだく」

ト馬の來るのを待つて其の馬のかけになり二人立ち並び行くに、丁度馬は彼の階子の茶屋の前まへに行くゆくと立止たちどまつて少しも歩あかず、二人はかけぬけば見付けられる故同じく馬と共に立止たちどまるに、馬引は馬を打うつて、

馬引「エ、このならず奴は何をし居をるのじや、日は暮くれるはやい」
トうてども動かうごかず、やがて馬は小便せうべんをしやくく、彌次郎北八に
トバちりはねて小便せうべんだらけとなり、彌次郎「エ、コリヤ又情なさけない目に遭あ

ふたわい」

北「ア、くさいく。ソレ彌次さんお前の方へ流れるよ」

彌「畜生めが飛んだ目に合せる。これはく」ト飛び退けば向ふの門先に居る女が目早く見つけて 女「モシナく此方で御座りますわいな、サア御遣入りなされ……」

北「ソリヤこそ見付けられた……」

彌「コリヤ堪らぬく」

ト一目散に走れば、亭主飛んで出できたり 亭「コレナ階子がござりますわいなヲ、イく」

と呼ぶ二人は眞黒になりて逃げて行く、二人は漸々と呼を計りにか

け出して、下の森を打過ぎ元の千本通りに出で、今宵は島原の廓中を見物して安見世もあらば一泊せばやと申し合せて往來の人に道を尋ね、千本下りて行く程に町をはなれて東寺に至る。

それより壬生寺に参りて、こゝに叢寶店先に立て寄せたる怪しの茶見世に引こまれて其夜の宿と定め打ち臥したるが、翌る日、島原を見物し朱雀野より丹波街道を横ざりて、淀の大橋に至り爰より下り舟に打乗りて大阪へと赴きける。

大阪

抑照や難波の津は海内秀異の大都會にして、諸國の賈船木津・安

治の兩川口にみよしをならべ、碇を連ねて此所に諸々の荷物をひきぎ、繁昌の地云ふ計りなし、殊更花の春は、川船に棹さし天保山に遊び、櫻の宮引船の茶店に酔ひを催し、夏は大川松ヶ崎の納涼、難波新地松の尾登加久に螢をかり豆茶に腹を肥し、秋は浮む瀬太津湯の月、冬は解船町の雪景色、四季折々の眺め多かる中に目枯れぬ花の曲中は何時盛りの春の如く賑ひ、道頓堀の芝居は常も顔見世の心地して群集絶えず、斯る名譽の地を見残すも本意なしとて、彼の彌次郎北入なる者伏見の晝船に途中より飛び乗りして早くも大阪の八軒屋に至り、爰より船を上りたるは、最早黃暮時にして東西を知らず南北を辨へざれば、人に尋ね問ひつゝ長町を指して行くと、堺筋

通りを南に向ひ、日本橋へ出て來ると宿引が出て來て兩人を見て宿の相談をしかけると、早速に相談が出来て直様この長町の七丁目なる分銅河内屋と云ふ宿に着いた。宿「サア〜お客様をお供して参りました」

番「これは宜うお越しなさいました、お幾人様でございます」
「ハ
イ同行四拾七人」

番「ナニ四十七人様……、コレ〜お三ごんお大勢様ぢや、西の奥の間を打ち抜いてあげませい、能く綺麗に掃き出したが宜い、コレ久造、お足をお洗ひなさるお湯は何うぢや微温うても介意ない水でも埋めてあげませい、早く〜、時にモシ其の四拾七人様はまだ大

分お後でございますか」

綱「イヤこれは先達で鎌倉へ發足、吾々兩人はこれより泉州堺の天川屋へ」

番「エ、何んの事ぢや、矢張りそれではお兩人様ぢやナ、コレくおつんや、お兩人きりだから此方のお一人居られる狭い處にせい」

女「ハイ、其れでは御案内をいたしませう」

云ふ内兩人は足を洗つて上つて見ると、此の宿は此の邊りで第一番に大きな宿である、やがて六疊の間に案内されたが、此に一人の客があるので、

番「モシ御究窟にござりましたよが御一所になされて下さりませ」

この旅人は 丹波の人「サア、此方へ」

北「是は御免なせへ」

綱「モシ私等ア二三日も逗留して所々見物が仕度いからお頼申しやす」

番「ハイかしこまりました、先づ御ゆるりと」ト云ひすて、勝手へ行く。

丹「コリヤ何處から來りました」北「私らア江戸でござりやす、お前は」

丹「私は丹波の笹山在郷、今度高野へ行きよります」北「コリヤ御縁で御座りやすわいな」

彌「兎角旅は道連れお心安いが宜うござりやす」

宿の「飯上げませうかいな」三膳持きたり、やがて食事もすみたるころ大頭の女あんまいやらしき風にて入りきたり 接「お療治は宜ござりますかいな、何卒揉ましてお呉れんかいな」

彌「イヤ按摩さんかお前女だの、北八何うだ揉まねへか」北「此方から揉んでやり度へ」

接「ヲ、可笑なお前さん方はお江戸じやな、私やアノお江戸のお方は好きじやわいな」

北「お前薩張目が見へねえのか、見へるのだと此のうちに飛んだ好い男が居るに、見せてえなア」

接「然うでございませう」

彌「何んと按摩さん、この男より私たちが好い男か、そうして年は何方が若けえ、當てゝ見なせえ、當つたら兩人ながら揉んで貰ひませう」

接「ソリア直きに當てます」

北「こりア面白い、サア俺らは幾才位ひだ」接「お待ちなさい、お前さんは二十三四」

北「こりア強いワ、そして男振りは、好い男だらうね」接「左様でございます、お顔は能う道具が揃つてあります」

北「缺けてあつて堪るものか」

婆「お目が大きくて、そして鼻が」北「高いか低い」
婆「斯う云ふたならば腹を立てるか知りませんが、儘かに獅子鼻でございませう」

丹「ハ、ハ、面白いく」

彌「ちや俺らは何うだ」

婆「貴郎は大變老生ておいでなさる、お年は四十ばかりで、お色が黒うて鼻の開いた髭だらけのお顔でございませう」北「奇妙く、そして水膨れの様能う肥へて居なさるだらう」

彌「イヤ違つたく、俺はヒンなりした色男だよ」

北「嘘をつく、コリヤ按摩さん勝だ揉んでやりな」彌「約束だから仕

方がねへ、此所へ来てくんた」

接「アホ、其へ参上かへ」

彌次郎が後へ廻ると女の菓子賣箱を持ち來り菓子賣「能ふお泊りじやわいな、菓子買ふてお呉れんかへ」

北「ヒヤア段々出てくる、中々好い菓子だぞ、お前私等に賣る氣か」

菓「左様じやわいな」

彌「上方の女中は手があるの」

菓「手も足もないがむ茶にお前さん方に惚れたのじやわいな、左様思つて菓子買つてお呉れや」ト箱を出してかつ手へ行く。

北「エ、顔の憎い程饒舌る奴だ」

ト云へつゝ彌次郎に目配りしてそつとはこの中より菓子五ツ六ツ取り出して後へかくすと、按摩手早く取りてたもとへ入れる、彌次も北八も一向知らず居るに、人の足音する故又二ツ三ツ急ぎ取りて脇へ置くと按摩又取りてたもとへ入れる、其内女茶を持て来り 女「サア温ものを上りなされ」

彌折角お前來なさつた物をまん更すげ無くもしられめへ」ト菓子はこの中より、

「是は幾干だ」

女「ハイ四文づゝじやわいな」ト並べ立つるに、彌次も北八も丹波

の人も一同に食ふ 北「コウ待ねへ、無姓に食つて敷が知れめへ」

女「宜ござります、何程なりとお食りなさいまし、此方只でも上げますノウウお蛸さん」

按「左様く、サア宜敷うございます、此方のお方揉みませうか」

北「オヤモウ仕舞ひか」按「サア貴郎、妾しが側へ寄つても介意ひませんか」

北「オツと宜しく」

女「お茶をモウ一つお飲り」

按「お鍋さん御馳走をしないさい、このお人達は素いお心善しじや、サア貴郎お横に」

北「モウ肩は仕舞ひか、剛氣に早いナ」

丹「こりアお前さん達の口の旨いのに掛つて大變菓子を食べた、幾錢になる」

女「ハイ〜お三人様で二百四十八文でございます」彌「ヤア飛んだ事を云ふ、何にそんなに食ふものか、北八は幾個だ」北「然うだな、幾個であつたか」

丹「私は四文のを五ツ食つたから、そりア二十文やるぞ」

彌「そんなら後は二人で出すのか、馬鹿〜しい、菓子よりか旅籠賃の方が安い」女「それでもお食ひなされた物を仕様がな、オホ、」

彌「イヤオホ、處ぢやねえ、飛んだ目に遣はせる」ブツ〜云ひながら仕方なく錢を拂ふ、此内按摩揉んで仕舞ふと北八が 北「按摩さん幾干だ……」

按「ハイお二人でお錢一筋お呉れいな……」

北「ナニ五十づゝかコリヤ高い〜」ト是も後では是非なく百文拂ふと、二人は立つて行く。

彌「上方の女にや油断がならねへ、而し菓子賣奴がお己を馬鹿にしてけつかるが、彼の上菓子を此處に這ひ付て置いたを知らぬ奴だ」ト後ろを見れどあらず、北八も自分の置きたる所を見れどもあらず此内勝手より湯と茶を持ち來り 女「御退屈様で御座りましよ」と置

いて行く。

北「エ、今のが有ると丁度好いのには如何した知らん」

丹「ソリヤ今の按摩が取て行たもんじやあゝハ、イヤ此に好い物が
ありよる」

ト後の柳行李を明けて小さなまげ物を取り出し 丹「サア、コレヤ
道修町の店で貰つて来よつた砂糖漬じや、茶の子に、一ツ違らつしや
れ」

北「コレヤ有難へ、彌次さん何うじや澤とやらかしねへ」

丹「インニヤ其様に食つて貰てはならんわい、此所くされ」ト引取
りて早々に仕まう、此時に布とんを持ち来り、

女「もふお床延べませうか」ト床を敷く内今一人の女勝手より枕を
持ち来り投げ込んで行くを見れば、こは如何に先刻の女按摩である
から皆々膽をつぶし 男「モシ女中、今其處へ来た女は先刻の按摩で
はねえか……」

女「左様でござります……」

男「何うして目が見へるのだ……」

女「ありアお客様方の所へ出るに目明きではお心置きがあつて悪い
と云ふので、お座敷へは那んなに目の見へない様な振りをして出る
のでございます、此處の宅で大方仕事がありますから、それで歸り
掛けには何時もあんなに勝手を手傳ふて歸ります」

彌「ヤア扱ては俺らが事を能く當てた筈だ、目が見へるものを」
北「そんなら俺らが物したのも物しやがつたに違へねえ」
彌「オ、可笑しい、お前さん方に貰つたお菓子だと云つて、妾しも斯んなに貰ひました」

袂から三ツ四ツ菓子を出して見せ、笑ひながら勝手の方へ行つて仕舞ふ。

北「大笑ひ〜」

彌「矢張り那方が下に腹に毛の無えのだけはハ、ハ、ハ、」
ろく〜に按摩はとらず菓子までも

ここに目の無い故に取られた

斯く打ち興じつゝ夫より三人とも蒲團ひつ被りて打ち臥したるに丹波の人は早や先に高軒かき出せど、二人は未だ寝入りもやらず彼れこれと話しあふうち、此の家の裏通りの畑には犬の鳴聲、割竹の音、時の太鼓も早や子刻の数を打つ頃になると北八ヒヨイと頭をあげて、

北「コレ彌次さん、お前今頃にコソ〜と何をする」

彌「何故か餘り寝られねえからフツと思ひ出してコレ見る、足で斯んな物を掻き寄せた」

夜着の中から小さな曲物を取り出して見せる。

北「オヤそりア先刻アノ人が出して呉れた砂糖漬ぢやねえか」
彌「コ

リヤ聲が高い、柳行李の脇に出てあるのを先刻から睨んで置いたか
らよ』

北「コウ一つ寄越しねえ』

彌「待て〜』

行燈が暗くなつて向ふの方にあるから委細は判らないが、取り敢
へず曲物の蓋を取つて一つ括んで口に入れて噛むとカツチリ 彌「こ
りア堅いワ』

北「ドレ〜』曲物を取つてこれも同じく口に入れてグシヤリ、ニ
チャ〜 北「エ、何んだ、いつそ灰だらけたものだベツ〜』

彌「こりア砂糖漬ちやねえ、何んだか可笑な匂ひがする』胸を悪く

してゲエ〜云つている聲を聞いて、丹波の老爺は目を覺して此の
體を見るや否、吃驚仰天 丹「ヤア〜お前達はコリヤ何をする、私
が女房を何んで喰ふのだ』

彌「ナニお前の内儀さんたア何んの事だ』

丹「何んの事だとは情けない、ソリア私が女房ぢや、この入物の蓋
を能う見なさい』

云はれて彌次郎兵衛飛んで起き、行燈の前へ持つて行つて彼の蓋
の書附を讀んで見ると、

彌「秋月妙光信女、ヤア〜〜そんなら此の曲物はお前さんの内
儀さんの骨ぢやナ』

「オ、ナニ骨とは……こりア大變〜。道理で胸がムカ〜する。エ
イ何う仕様」

「オ、お前さん方の胸が悪くなつたより、私は胸へ突張つて来た。こ
りア私の村の法則で、その骨を高野へ納めに持つて行くのでござる
マアその大切な骨を何故喰つた、お前さん方は眞人間ぢあなからう
鬼か畜生か何うしたのぢや〜」

袂を顔に押し當て、オイ〜泣き出した、彌次郎兵衛も可笑さ半
分に腹を立て、

「彌」エ、難しい事アねえ、お前えが先刻柳行李を開けた時に、轉げ
出ていたの知らずに居たのは其方の無調法、それを又砂糖漬だど

思つて食つたのは私ちの粗相、ソリア五分〜だ、何もイサクサは
ねえ」

「オ、イヤ聞かぬ〜、元の通りにして返せ〜」喧ましく喚き立て
るやつを北八、種々と言葉を盡して云ひ宥め、漸々と納得させ静ま
りければ彌次郎も心の中におかしさを紛らして、「イヤモウ面目次
第もねへのさ」

人の骨食ふも理り若いとき親の脛を食ひかぢりたる身は

高津の宮

此の彌次郎が口すさみに丹波の人も心どけて笑ひを催し、漸くに

機嫌直りて打臥したるが、程なく一睡の夢覺めて夜明ければ、互に
食事も済みて丹波の人は高野へ出で行き、彌次郎北八は二三日逗留
の積り故爰もとの名所一見せんと仕度する内番頭出で 番「何れへか
お越しなら御案内の者お連なさるが宜ござりませう」

彌「ホンに其をお頼申します」

番「コレ、佐平次殿一寸とこんせ」案内の男は呼ばれて此處へ出
て来た。

番「このお方が案内を頼むと被仰つて居られる」

北「モシ藁草履を二足買つて貰ひてえ」彌「イヤ一足で宜い、俺らア
京雪踏を買つて来た、何うも藁草履ではミス、田舎者の上方見物

と見へて悪い」

北「ナニ旅で體裁も糸瓜も要るものか」

佐「お仕度が宜いなら出掛けませうか」彌「サア、早く参りませ
う」

皆「行つてお出でなさいまし」

これから兩人は佐平次に連れられて宿を出ると、佐「何んと斯うい
たしませう、天王寺生魂は住吉御参詣の時に参りなさるとして、
今日は此方の方へ参りませう」

長町通りを北へ取り樋の上より高津新地へ出て先づ高津神社へ参
詣する。此處は往昔し仁徳天皇の高き屋にのぼりて見ればと詠まは

た舊地で、今にいたるもなか〜繁昌、社内しゃないに豆腐田樂とうふでんがくがあつて、詣よの人ひとを呼び込む聲こゑ。〇「サア〜お這入りなく、これへお休やすみ

向むかふの方ほうでは遠眼鏡とほめがねの口上こうじやう。

口「サア見なさい〜、大阪の町々は蟻ありの匍はひ出るまで見へる、近ちかくは道頓堀だうとんぼりの群集ぐんじふアノ中なかに坊様ぼうさまがお幾人いくたりある、お年寄としよりにお若い衆わかいしゆお顔かほの菊面きくめんが何程なにほどある、女中ぢやうちゆうがたの標緻おりのやうぶ無標緻むおりのやうぶ、焼芋やきいも買つて喰つてござるも濱側はまがはで小便せうべんするも橋詰はしづめの非人共ひにんどもが標祥じゆはんの風何程取つたぞ、手に取る様やうに見へるが奇妙きまう、又風景またふうけいを御覽ごらんなら住吉沖すみよしおきに淡路島あはぢしま、兵庫ひんごの岬みさき、須磨明石すまあかし、大船おほふねの船頭せんとうが飯めしを何杯食なんはいくふたか何食なにくふた彼食かぐ。

たも直ぢかきに判わかる、まだ〜不思議ふしぎは此こゝの眼鏡めがねをお耳みみに當あてるぞ芝居しばい役者やくしやの聲色こゑいろ附つき、拍子木ひやうしぎのカタリ〜残のこらず聞きへて見みたも同然どうぜん、お鼻はなを寄よせれば料理店らいりてんの鰻うなぎの匂におひブン〜と食あがつたも同然どうぜん、たゞの四文しもんでは見みるがお徳とくぢや、千里せんり一目ひとめの遠眼鏡とほめがねこれぢこれぢや」

北きた「眼鏡屋めがねやさん、音ねに聞きいた新町しんまちとやらも近ちかふ見みへるかね」眼め「左様さやう、このお山やまのツイ側そばに見みへます」

眼め「そりア近ちかく見みへるのぢやねえ遠とほく見みへるのぢや」

眼め「何故なぜ」
眼め「ハテ此こゝの高津かうづと新町しんまちとの間あひだはたつた一寸すん二三さん分ぶほかものを」

「そりやお前大阪の繪圖で見てもいいな」

「さやう〜ハハ、先づお宮へ参らう、ハ、ア如何さま好いお宮だ」

ト三人とも神前にぬかづきたてまつり、

もろくの神に脊くらべし給は、いよいよ高津の宮の尊さ

大阪見物

(天神の富の札)

是より境内の石段を西におり立ち、谷町通りに出でたるに、何とやら腹さみしくなりたれば、幸ひ居酒屋めきたるを見付けて立寄

「モシ何ぞありやすかね……」亭「ハイ煎殼に鳥貝、蚌の昆布巻じやわいな……」

北「さつぱり分らねへ、其内の美味物ならなんでも宜い、出してくん」

亭「ハイ畏まりました、直ぐに差しあげます」彌「そして酒は三合ばかり頼みます」

北「時に尾籠ながら用足しに行つて來様、雪隠は何處だ、オ、有るぞ〜」

縁先きから向ふへ廻つて雪隠へ這入ると、此の時内裡の方では肴が出たから、彌「サアマア一つ始めなせえ」

佐「マア貴郎から……」

彌「そんならお先きへオツトツト……、ア、好い酒だぞ、コレ
北八早く出ねえか、酒が皆んななくなる、早く……」

急ぎ立てられて北八は雪隠の中で咽喉をグビ……させながら、

北「オ、今出るぞ……」

狼狽て戸を開いてズツと出ると、不思議なる哉、此處は酒屋の宅
ではない、抑も此の雪隠は二軒前の雪隠で、此の酒屋と裏家に住む
人の家との兩方で使ふ雪隠であるから、彼方にも口がある此方にも
口がある、處が北八は慌て、這入つた方の戸を開けないで彼方の戸
を開けたので、そこには隠居らしき老爺が一人、何やら頻りに小細

工をしていたが、北八を見て驚き顔眼鏡の上からジロ……と見るか
ら、北八もウロ……して間誤付く内、彼の老爺「老」モシ……お前
んは誰れた」

北「ハイこれは違つたらしい、モシ酒屋へは何う参ります」
「老」ハ、
ア判つた、お前さんは表の酒屋のお客だナ、ぢあ其の様側を左りに
取つてズラと行くぞ宜い」

北「ハイ……、オヤこりア行き止りだ」
「老」その戸を開けて行きな
い」

北「ハ、ア又元の雪隠へ這入らにア行かれねえナ」
雪隠の戸を開け
に掛ると、

〇「エヘンく」

北「南無三寶道が塞がった」云ふ聲聞いて雪隠の中から 北「北八がおつな方へ出て居るの」

北「イヤ彌次さんだな、己らア戸惑ひして頓だ目に逢つた、早く其方を通してくんな」

ト戸を明け掛ける、彌次郎内よりかけ金をかけ 北「イヤ最少と待つてくれ、そして力む事ア大毒だと云ふこつたから獨でに出て来る時節を待つて居るのだに依つて少し隙が掛る、ア、退屈だは金にうらみでも語ろふか」

北「其所で口三味線頼むぞ」

北「エ、とんだ事を云ふ、早く出なせへく」

ト押せども明かす、内にゆうくと浄瑠璃「戀の手習途見ならひて誰れに見しよとて紅かね付けよぞ、皆な主への心中だてヲ、うれしく」

北「氣の長い何の事だな」

北「ヤアく浄瑠璃最中」

北「エ、コリヤ早く出無へかく」ト云へど内には何の音沙汰無き

故北八急き込み 北「如何だ、もふ出たかエ、コリヤ彌次さんく」ト云へど更に音なし。

北「コレサどふするのだ」

鹿な事を云へなせへ」

トどんく打たくと、戸が破れる音に「オコリヤ何じやいな、雪隠の戸がやくたいじや」

北「イヤ全體お前がたア此様に兩頭の雪隠にして置くから悪い」

亭「それだつて兩人連れで雪隠へ行くと云ふ事があるかい馬鹿くし」

北「了簡して呉んなせえ、私たちが悪るかつた」膝頭を撫りながら店の間へ出て來ると、

佐「オヤ何うなさいました」

北「打身には酒が宜いと云ふ事だ、早く一杯飲まして呉んな」此處は延喜が悪い、又先きへ行つて飲まう」

早々此處の勘定をして出掛けると、酒屋の亭主は不精無精に挨拶もせず、小言を云ひながらふくれてかへりて居るを二人はおかしく此所を立ちいづるとて、

出る事のおそい早いで争ひしこれ宇治川の雪陣かそも

それより谷町通りを安堂寺町より番場の原に出で話しながら通り行く程に頓て天満橋に至りける。

まことどや淀川の流れ廣く行きかふ舟の漕ぎ違ひ、棹差し合ひて諸ひ、或ひは遊山舟に三味線太鼓はやし立て行くを、橋の上より往來

の人立ち止まりて、

橋の上「ヤイア〜己れ等其ないに奢りくさつても、家へ行んだら借
錢をひにせがまれて吠い居ろがな、いらひ阿呆じやあほよ〜……
……」

舟中「何じやい其方が阿呆じやわい……」

橋の上「何にぬかしくさる、おどれらが阿呆じや……」舟中「ア、阿呆
くらべせうかい……」

と橋の上と舟の中とで散々に悪口を云つて居る、多勢の見物が「ア
イ〜〜」

此内彌次郎、北八も群衆に押されながら此の橋に差しかゝり橋の

上と舟の中との喧嘩何處にもよく有るやつと心におかしく打過ぐる
とて、

真黒になつて腹立つ喧嘩してあほよ〜と鳥めがする

それより此橋を北へおり市の側通りを行くに、爰は青物の市立つ
所にて殊に繁昌の地なりける。

青物の賣買ながら商人に尾ひれの見ゆる市の側まち

程なく天満宮の御社に至るに、誠や神徳の彰々たるは參詣の人ど

よみにあらはれ、料理茶屋の赤前垂角になまめき、水茶屋揚弓場の
寒張聲往來の心を動かさせ、或ひは山海の珍物見世物芝居輕業曲馬乗
境内に充滿たり。

何ひとつ御不足もなき御繁昌まことに自由自在天神

かくて社内悉く順拜し、靈府の女の眞白顔も横目に見なし、小山屋の前をも空しく打過ぎ天神橋通りに出でたる時、彌次郎の履きたる雪駄如何してや横緒を抜けたりければ、

彌「仕舞つた、京の物は油断ならぬわい、強勢に請合つて賣りやがつて忌々しい」

ト小言を云ふ、向より紙屑買「デイ〜〜〜デイ〜〜」

大阪にては紙屑買がデイ〜〜と呼び歩くを彌次郎は江戸の雪駄直しと思ひよびかける。

彌「コレ〜この雪駄頼みます」

屑「ハイコリヤ片足かな、片足では如何もならんわいな、見りや其の履いてたも鼻緒が何うやら損ねそうだ一所にさんせ」

彌「ホンニ此奴も今に抜けるわい、とても事に一所にして幾價だ」と云ふと屑買は之れを買取るものと思つて値段を付けると、彌次郎の方では鼻緒を直す丈のことであるから、

彌「高い〜二十四文で宜からう」

と云ふ、屑買の方では安く下げられたのであるから喜んで錢を渡し雪駄を受取つて荷の中へ入れて行かふとする。

彌「コリヤ〜待つた〜己れに錢をよこして其の雪駄を何うするのだ」

「屑ハテ買うたのじやわいな……」

彌「とんだ事を云へ、鼻緒が抜けたから直して呉れろと云ふたのだはな……」

屑「イヤ此方は私を履物直しじやと思ふてかいな、コレ紙屑買は渡邊から出やせんぞへあたけなあるぢやわい……」

彌「イヤ此の横倒しめが何故そんならデイ〜と云つて歩くのだト切込みかゝるを、佐平次おし止め、

佐「ハ、解へた、コリヤお前が危相じや、私や先刻からかわつた事やと思ふて居たが、アノお江戸じや履物直しがデイ〜と云ふて歩き居ると云ふ事ぢや、當地では屑屋どのが皆デイ〜と云ふて歩

く事を御存じないさかい御了簡違ひじや、コレ屑やさん此方が悪い許しなされ」

屑「じやつて餘りなわろじやいあんだらくさい」

彌「ハテ間違ひじや、其の雪駄を返して呉んな」

屑「否じやわいの此方を履物直しじやと言ひくさつて此方外聞が悪いわいな」

ト腹立つを北八佐平次中に入り漸々雪駄を取返し、彌次郎は草履を求めて、是れより天神橋を南へわたり行くに、けんくわにや群衆の中に紙に包みたるものあり、拾ひ見るに富札にて
口八拾八番と書
きあるなれば、何人かおとせしなるべし。

「鳥モシ今貴郎のお拾ひなされたのは富の札じやないかいな」
「うだらう、八十八番とありやす」

「鳥コリヤ座摩の宮の札じや、而も今日付つ日じやわいな、大方今頃はもふ振つて仕舞ふたるぞいな」

彌「そうさ何うせ落す位の物だもの空つばの札であらうへちまにもならねへ」

ト其まゝひねりて捨てるを、北八ちつと拾ふて懐中しやがて座摩の宮に至るに、今しも富くじを明けし所とて群衆の下向おびたしく其中人の話を聞くに、

人々「ア、残念な事をしたわいな、私な彼の八十八番既での事に私

が買ふ所じや有つたわいの、彼れを買損ねたは此方の運の來らんのじや、買うたら第一番で金百兩取り居つたものを」

彌次郎聞いてぎよつとして、彌「北八開いたか今の札を放棄らなんだら宜かつたものにエ、如何しよ後へ戻つても最ふあるめいか」

北「ナニ今迄有るものか」

彌「エ、残り多い事をした」

ト神前に至り見れば、富の札第一番よりだんく〜と書き、其内第一番の富八十八番と筆太に書いてあるに彌次郎あまりの事にあきれは

彌「エ、忌々しい、己等もふ一層の事坊主にでもなり度、とても運

の隠ける時節はねへ」

北「ハ、其んなに力を落すめえ、俺れが百兩取るからお前えにも三兩や五兩は貸して遣る、これ見なせえ」彼の札を懐中から出して見せる。

北「ヤア、手前え拾つて来たか、出来した、サア此方へ寄越せ」

北「イヤ然うはなるめえ、お前えの捨てたものを後からチャツと拾つて来たのだから、こりア俺らに授かつたのだ」

北「イヤ、畢竟俺が先さへ見附けて拾つたりアこそ又手前えの手へも這入つたといふものだから、元は俺の物だ」

北「それでもお前え一旦捨てたぢあねえか」

北「ハテそう云はずとマア寄越せ」

北「無理に引奪らうとするけれ共、北八は何うしても渡さない、いろ／＼と争つてゐるから佐平次、佐コレ、静かになさい、其んなに兩人で云つてゐると、捨てた主が聞き付けて出まいものでもないから、此處は私しが挨拶だ、半分づつ分けたら何うでございませう、そして私しにも少し分配をお呉んなさい」

北「そりア承知の助だ、何しろ善は急げだが、金は何處で受取だらう」

北「お金はア、世話人の居る處で渡して居ります」

「其んならそけへ往つて見やう」
ト打連れて其所へ行きて見れば、

口上
當日殊の外混雑仕候に付當り札の御方は明日四ツ時金子
御渡可申候 以上

月日

世話人

斯の如く下げ札してありける故扱はけふの事にはいかすとまづ
前に参りて、

御神の利生格別ありがたや罰にはあらで當る富札

斯く詠じて大に勇み立ち社内残らず順拜して表の方に立ち出で、
北「ナント其内捨てた奴が金受取りに往きはせまいか」
佐「ソリヤ氣遣ひないわの往つたとて札と引替にせにや渡さんさか
い何程當人でも無證據じやわいの……」彌「きめうく剛敵に面白く
なつたわへ……」

北「あしたは百兩の金に久し振りの對面」

彌「エ、久し振もおかしい、遂ぞ逢つた事もなくてハハハ、」と勇
み喜びやがて彼處の茶屋に這入りて先づ前祝と酒汲みかわしぬ。

道

頓

堀

(新町の珍談)

斯くて彌次郎北八は思ひもよらず百兩の富に當り忽ち勢ひを得て座摩の社地を出でしより煮賣茶屋に入りて酒汲み交しほろ酔機嫌となり面白氣に浮れ立ちて案内者の佐平次に引かれ、難波御堂の穴門より御境内を順拜しながら、

お婦み様と聞けば女の名にも似てあら有難の穴かしこなり

其より仁徳天皇の社に詣る、これは世俗に博勞の稻荷といふ、博勞稻荷は別に境内にあり。

博勞の稻荷と云ふもことほりや繪馬うりて食ふ店も見ゆれ

門前に田樂茶屋あり、**「お這入りなく、田樂の焼立上らんかいな……」**

北「エ、知れた事をいふ、田樂の冷めたいのがいけるものか……」

芝居の木戸「サア今が盛衰記無間の金じや評判で〜」**「無間の鐘で凄じい、此方や百兩取つて居るは、途方もねへコウ北八ナント是から新町とやらへ女郎買と遣らかしては何うだ」**

北「面白い直ぐ行かふかノウ佐平さん」

佐「其りやお出でなさるは宜いが、無羨ながらお前さん方の其の體じやあかんじやないか、コリヤ局女郎などお買なさりや格別、店つきじやて、少と身體勘定して明日の夜さりなどお出でなされ」**「コリヤ成程お前の言ふ通りだ、ハテ百兩と云ふ金が取れるものを、とても買ふならその太夫とやらを買ふて見る心易だ」**

北「アヤ」

佐「其りや其の筈の事い私お供して九軒の揚屋何所など御連の申すぞ、時に是が大丸屋、何トゑらいもんじやあるがな」番「貴郎是へくお入なく」

北「何と北八此所へ今着物を誂ひて往かうじやねへか」佐「ハ、お前さんもまん勝な、明日の事になされませいな」

北「そうさ今に限らねへサアく歩みなせ」彌「其んなら明日の事にしよう、北八手前は何にする目算だ」

北「衣物の事か左ればの結城のぐつと粹な縞で三枚計り羽折は龍門のこりくする奴の芥子あられなぞが金持ちらしくて宜からうちあ

ねえか」

彌「イヤく其れではお店者めく、そんな着物を着たらコレお前昨夜は何程出した、ヨの字かキの字か、此方アホ久の白物でキ位ひ出たから、ゑらい徳をした杯と洒落やうと云ふ風體だから治らねえ、俺らは縞縮緬の揃ひに黒の羽織、お太刀を一本一寸ときめの判官もりひさは妙だらう、但しはグツと大巫山戯に緋鹿子の縁取り無垢、上に結城の棒縞、對の羽織は餘まり利いた風であらうか、八丈も野暮になつた、唐棧は老爺めく、南部縞はモウ揚屋にでも脱いである様になつたから恐れるく」

北「成る程着やうといふと正逆か着るものも無えやうだ」

夢中になつて話しながら行く後邊から往來の者。○「着る物がなきア矢張りその後邊に大きな紋所のある幟の染め返して着て居るが宜いワハハハ、」

北「オイ此奴らア何を吐しアがる」

○「お前の事ぢやないハハ、」一目散に逃げて行く。

北「エ、忌々しい奴等だ、今に見ろ、明日は何んな物を着ると思やアがる」

佐「ハハハ、こりアお前さん方がそんなに妙な風をして縮縮だとか羽二重だとか云ふて居られるから、それで笑つていたのでございませう、こりア向ふが道理だハハ、時にこれから阿彌陀池へ參詣して

砂場の和泉屋をお目に掛けませう」

馬「イヤ宮寺もモウ飽き果てた、それよりは早く新町へ行きてえものだが、明日の晩までは剛的に待遠しい」

佐「そんなら斯ういたしませうか、私しが一つ損料の着物を借りてあげます故、それを着て今宵新町へお出でなされ、お金は後でも大事ない、私が親方の知つてじや揚屋へ行くさかへに、何うで明日は百兩お取りなされるのじやもの何あるとそうしなされ」

北「コリヤ面白い……」

馬「如何様なア其んなら直に歸つてお前に其の算段をして貰ひやせう」

ト有頂天になり心齋橋を渡りて南へ早く道頓堀へ至る。

當地大一のさかり場とおやま藝子いせなまめかしく行きかう様賑かなり。

いつとても關子狂はじ三味線のどろ頓堀の賑ひはそも

其日も早七ツ下りて大西の芝居打出して櫓太鼓の音喧しく評判

の聲木戸口にあふれて見物もごよみつ押し合ふ中を漸々摺ぬけ

行くまゝに角の芝居中の芝居の看板さへも目に就かず、若太夫

竹田の切狂言も打出し仕舞ひいろは茶屋の仲居赤前垂と俱に毛氈を

引摺りて走り島の内の迎へ駕籠ハイ〜馬じや〜に連れてままれ

行く程に早や日本橋近くなりて往來もすきたりければ、頓て走り出

して行くまゝに早や長町の宿に着きたりける、佐平次先きに立ちて

佐「サア〜お歸りじや」

女「お早ふ御座ります」

北「アイ〜是れは佐平さん御苦勞……時に今の損印の理屈は如何
だろ……」

佐「承知々々、直に詮議して參上わいな……」北「そんなら早く〜」

と二人は奥へ通ると女來りて 女「モシナお湯におめしなさらんかい
な、おひもじかア御膳に致しましよわいな」

男「イヤ飯も咽喉へは通らぬ、何だかソワ〜して、しかし湯へは

一寸と這入つて來様」

北「遅くなるから湯も宜いぢあねえか」

彌「イヤ顔ばかり洗つて來る」北「置さアがれハ、ハ、」

彌次郎兵衛は湯へ這入りに行く、暫くして佐平次指料物を風呂敷に包んで急ぎ持ち來り、佐「お待ち兼ねでございましたらう」

包みを解くと北八、彼れこれとひねくり廻しながら、北「モシ不意氣なものばかりだね」

佐「それだつて是れが一番上等でござります、お前さんには此の黒袖が宜うござりませう」

北「何んだ途方もねえ紋所だ、そして丈けがテンツルテンで袖が又

恐ろしい大きい、これを着たら無鹽の奴隷といふものだらう、其方の綺は何んだ」

佐「太織だそうで」

北「イヤ此の小紋が宜からう」引立て、着て見ると女の着物、佐「ハ、ハ、私男の衣物かと思ふて取て來たわいの」

北「よし、斯うしよ小袖一ツビア吝れだから、此の女小袖を下に着て上は太織綺と極めやしよ」

ト二ツ重ねて着替へ帯をしめて居ると彌次湯より來り、彌「おや佐平さん早いなエ、北八めが着たわ、男振が好いから何處へ出しても借着したと矢張り見へる、」

北「洒落すと早く仕度をしねへ」

黒「己等ア此の黒い奴がよし〜旦那と見へる様にお太刀一本斯ふ
きめて行くは」

黒「コレサお前衣物を着ねへか、裸身に其の脇差を差して行くつも
りか、醫者が清盛様の脈を行きやしめへし頓だうる堪へようだ」

北「時に羽織は」

佐「お前様は此の抜紋にしなされ」

北「客な羽織だ、干鯛の仕切に行かふと云ふ風だ」

黒「人の事を云ふ手前の風は帯木寸伯様の代脈に來たと云ふ風だ〜」

佐「お支度が宜ござりますなら參上わいな」

北「ヲヤ己等は未だ湯に這入らんだ」

黒「馬鹿云はずとサア〜出掛け様」

佐平次は兩人が百兩の富籤に當つたのであるから、何でも付け込
んで遣らうといふので、宿屋の番頭に吹き込んで新町の揚屋へ頼み
の手紙を貰ひ、足も空にして長町を堺筋に出て、早くも順慶町へ出
て來ると、此處は毎夜の夜店で兩側の露店よりいろ〜の食物店の
客を呼ぶ聲耳やかましき位ひ。

○「御評判のちくら鮓、鯖ぢや〜、鳥貝〜」

△「ヤア負けたく〜新米の煎穀ぢや〜」此處で鳥貝の鮓を買つて

食べながら歩行く。

北「コウ彌次さん、俺にも寄越しねえ」

彌「後で竹の皮を遣らう」

北「エ、虫の宜い此方へ……」取りに掛るを彌次郎兵衛遣るまいとする、處へ下から一匹の犬がヒヨイと飛び付いて引奪ると彌次郎兵衛「彌「アツイタ〜〜……」

北「何うした彌次さん」彌「忌々しい畜生奴にしてやられた」

犬「ワン〜……」

彌「エ、此奴目が……」と足で蹴る、犬逃げて井戸側へバツタリ。

彌「ア、痛へコリヤ飛んだ所へ井戸を出して置きやがる、四ツ辻の

真中に」

佐「コリヤ井戸の辻と云ふ所じやわいな」北「いゝ氣味だ、おれに食はせねへ返報だは」

ひとつ下されど犬めがとり貝扱もよい氣味圍子ならねど

其れより往來を押分けて早や新町橋を打渡りひやう單町にぞ至りける、扱此の曲輪は寛永年中に始めて御免許あり、田圃を開きて新に町を建てたりしより新町と呼んで廓の總名となせりとぞ、昔より今に至る迄繁昌云ふ計りなり、兩側の六字見世賣物に花をかざりて美しさ限りなし、一軒〜に差覗きつゝ其れより阿波座越後町を見物し、局女郎の袖引くを罵り興じて行くまゝに、やがて九軒町に至

る。

佐「モシ〜此處が皆揚屋でございます」北「成程、御大層な屋臺骨だ」

佐「サア〜此處だ〜、お前さん方は一寸と其處で待つて居て下さい」

兩人を玄關に待たせて置いて佐平次一人吉田屋の勝手口へ這入る暫らくすると亭主は早速羽織袴で玄關に出迎へ亭「これは宜くお越し下さいました、コリヤ〜仲居共、御案内申せ、サア何うぞお通り下さいまし」

「そんなら許しなせえ、コウ北八來ねえか、門口に立ちはだかつ

て花屋の柳ちやあるめえし」

佐「こりア出来ましたハ、サアお越し」

玄關より上つて仲居の案内に連れ、幾間も〜越して奥座敷の立派な處へ案内すると、佐平次は故意と兩人を大盡風にもてなし、遙か末座に座をしめる、仲居は茶、煙草盆を持つて來る、座が定まつた處へ亭主「亭主、私しは當家の亭主でございます、今回は御最負被下て有難う御座います……」

「御亭主さんか、私ちらア今度江戸から仕入れに登りましたが、御當地は始めてでございます、そこで逗留のうちは何うせ度々参りませうからお願ひ申します、其の代り私ちらア一寸と來ても端金

を使ふ事は嫌だから無駄使ひの一箱や二箱は別に爲替に振つて寄越してあるから、そこは一向未練なしサ、しかし生得が商人と云ふ者だから初めからそうも行きませんに仍つて、マア今夜はお前えの方でも随分安上りに負けて呉んなせへ」

「左様〜斯う致しましよ、夜前お着きなされてお草臥もあるさかい、マア今宵は太夫さん方かつて御らうじて御酒一ツ上つてお歸りなさるが宜ござりましよ、ハテ又明日の夜さりなどお供致しましよかい」

ト此に佐平次心中にて彼の百兩の件萬一間違のある時はと心得、今宵は一杯にかぎり早くつれもごりて明日の首尾を見る目算なり。

「何れとも宜しく〜そしたら仲居衆太夫さんがたマア借りにやらんせ」

仲「ハイ賢まりました」

ト立つて行く、此内酒肴出で家内共合手に飲みかけて居る、此の隣の座敷に西國方のお侍と見へたる客人藪子を呼んで大騒ぎ、ソツトふす間のすきより見れば、

唄「二筋程ある薄鬢の頭やがてすばらに鳴る鐘ならば權八が宜ろふけれど是れから貞月と云ふてお呉れの神かけて願ひと〜かしくチツシヤン」

仲間惣八「イヨ〜お島さんソリヤ南の權八めが摺ものゝ事ぢやな」

舞子「左様ぢやないな、東南さんの手を付けてぢや有つたわいな」

客「コリヤ〜我共是から奥におどりでも踊つて騒ぐとせう……」

この時仲居は帳面と硯箱を控へて次の間敷居際に座をしめる。

仲「扇屋の折琴さんこれへおこし」

呼び出すと折琴太夫例の襦に太夫姿美々しく座敷に這入つて來

て、盃を取つて飲む真似をして下に置き、仲居の顔を見てニツコリ

笑つた儘立つて行く。

仲「樋屋の雛松さんこれへお越し」

斯くして段々と太夫が一人〜出て、皆盃を取り飲む真似をし

て立つて行く、彌次郎兵衛、北八の兩人は有頂天になつて、珍らし

そうに眺めている、聽て残らず濟むと 仲「誰方ぞお氣に入りましたか」

北「イヤモウ残らず氣に入つた、其のうちで三人目に出たは何んど

云ふ太夫だナ」

仲「ハイ西の扇屋の東路さんでございます」

佐「しかしマア今夜は御見物の事だから、明日の夜でも又緩然とお

遊びなさるが宜敷うございませう」

彌「何故、今夜でも宜いちあねえか」

佐「ハテマア私次第にして置きなされ」と心に一物ある故是切りに

仕様とする、彌次郎目算違ふせう〜 彌「其んなら酒でも鱧腹遣ら

かせう」

仲「藝子さんは」

佐「否其れも宜いわいのお急ぎじやさかへ」

北「此所へ来て酒許りじや始まらねへ、何と呼にや此の家へ氣の毒じやねへか」

仲「何のまあサア一ツお上りなませ、ホンニお羽折お取なませんかいな」と仲居ども二三人立ちが、り彌次郎北八に羽折をぬがせて疊みながら裏に損料の記あるを見付けくつ／＼笑ひ出し仲居の一人、仲「コレ見いな十もんじの糸縫があるわいな。大方損料の着物借つてお出でたのじやあろ」と小聲にて笑ふ、凡て長町の損料屋には此

しるしありて旅屋の客人借りて来る、佐平は是れを聞て心の中におかしく、彌次北八は少しも知らず。

彌「ナント女中衆此の廊中に太夫は幾人程ある、皆惣揚にして遊んだら面白からふ」

北「私等が逗留の内何卒皆なへ揃の仕着でも残して行き度えもんだノウ彌次さん」

仲「ソリヤお嬢しうおざります、その仕着せの裏に「十文字」の印をつけて」とそれとなく悪口を云ふ。

仲乙「コレそんな事を……聞へては悪いから……」と袖引き合つて笑つて居るが、二人は未だ氣が付かない。

北「ナニ裏に十の字とは何にか當りのある事だナ、畜生奴が、成る程お前えなぞは色男があらう、剛勢に仇物だ、ドンお盃を頂させう」

仲甲「オホ、、飛んだ油をお掛けなさいます、左様なら十の字へあげませう」

北「ナニ十の字とは俺が事かこりア有難てえ」

自分が黽らんでいる事とも知らず盃を取りあげると、仲居は銚子を取つて酒を注ぐ、此時北八仲居の膝を一すいと突く。

仲「オ、痛ッ」

飛び退く拍子に運悪るく袖が盃にさわると北八の膝の上へパツ

タリ落ちる、酒は流れて着物も曇もベタ／＼になる 仲甲「オ、これは何うも失禮をいたしました」

仲乙「滅相な、些と氣を注げたが宜い、貴郎シメ／＼してお心が悪ふございませう、そして酒の掛つたのは浸みになりますゆへ、早く含み水で洗つておあげ申すが宜い」

仲甲「ホんにサツと洗つて参りませう、お脱ぎなさいまし」立ち掛つて脱がそうとする北八は、下に女の着物を着ているから、上着を脱いで體裁が悪いと思つたから、立ち寄つて来る仲居を憐て、突きのけ、

北「イヤ洗はずとも宜し／＼、こりア常着ぢや」

仲「ハテ御遠慮には及びません、お脱ぎなさいまし〜」

この仲居兩女ども北八の着物にこれも同じ十字の印しがあるか
見て遣らうと、口には出さねど目と目で領さあい、無理に兩女ども
帯を解きに掛るから北八臍を潰し、

北「コレサ宜いと云ふに」

興「ハテコリヤ北八ちよくり其所ばかり濯いで貰ふが能いわいな」
と損印故よごれがありて後で八釜敷云はれては困ると目顔で示す、
北八大にこまりはて、

北「エ、何のチト計り酒の染みた位」
中「さア洗ふて上げるわい」

と無理に帯引解くに、下に女の衣類着てゐる故北八兩手をかきめて
しりごみす、彌次不思議に思ひ 興「ヲヤ〜手前何んだ女の着物を
着て居るか」

北「エ、飛んだ事をいふ、もふ〜一ツ脱いだら寒くてならねへ」
とだん〜に後へちいまる。

佐「お寒かる一ツ上りなされ」

北「彌次さん其の盃を取つて呉んな」彌「ナニ手前手を延びん事は
ならぬか、盃其所にある、取りやな」

北「忌々しい、お前迄が己等を凹ませるな」

此内仲居彼の酒のかゝりし彼の衣物を洗ひ干上りしを以て來り、

仲「サア十の字が宜ござりますわいヲホ、」
と無理にわらふに、北八むつとして、北「コリヤ己等先刻にから己が
無言居りや十の字だの何のと己等に符帳を付けて慰み物にしやアが
るが、何で己等が十の字だ、其れをぬかせ〜」と怒り立てるので
仲居も困り果て、

仲「ツイ冗戯に云ふた丈けでござりますゆへ、お氣に觸りましたら
何うぞ御了簡をお願ひ申します」

北「イヤ不可ん〜、何んでもその十の字の譯を聞かねえ内は了簡
がならねえ」

佐「では宜い〜、そんなにお前さんがお怒りなさると無粹だも申

します」

北「ハテお前えの知つた事ぢあねえ、無粹でも山水でも頓着はねえ
アふんばり奴等、十の字たア何んの事だ、吐かせ〜」

怒鳴り始めたから彌次郎兵衛、佐平次の兩人は、種々どすかし辯
めたが、酒の加減か北八は何うでも十の字の譯を聞かねば了簡なら
ぬと云ふので、佐平次も面倒臭くなつたか、此の上は仕方なしと、
佐「コレ〜仲居衆、そんなに被仰るのだから仕方がない、十の字
の事を云つてあげるが宜い」

仲「それだつて……」

北「早く吐かせ」

仲「云ふたら又御立腹になるでございませう」

男腹ア立て、も私ちが飲み込んでいるから大丈夫、念晴しに云つて仕舞ひなせえ、俺らも何うか聞きてえ様だ」

仲「左様なら申しますが、アノ十の字とはこれでございます」云ひながら兩人の脱ひだ羽織を引繰り返して見せる。

男「オヤ、何んで此の羽織に十文字の印しがつけてある」佐「ハハ、コリヤ最うとつと根からやくたいじや、ハテ旅のお方じやもの其様に衣物を用意してお出でるお方はかりも無いものじやさかい、其れで損料借りでお出でじやわいの……」

北「ナニ俺らが損料の着物なぞを着て來るものか、飛んだ事を云

ふ」

佐「イヤモウ其んなに云つても駄目でございます、長町の損料屋の着物には皆十の字の印しがついてある事は、皆んな能く知つて居りますから、それで那んなに云ふのでございます」

十の字の譯がサラリと判りて二人は俄かに大回みとなり北八なまなかの事云ひ募り今更耻の上塗り悔しく思ふ内にもおかしくなり、そう、支度してそこ、と此所を出かけけるに、ソリヤお歸りじやト仲居共大勢目ひき袖引、笑ひ隠して送り出るにぞ三人やがて袂に立ち出で、

損料の着物のみかは太夫まで借りてみたりの不首尾たら〜

十の字のしるしありとは露知らず

借りし羽織のうらめしきかな

かく打ち興じつゝ長町さして急ぎける。

百兩の當はづれ

斯くて三人は新町の遊びに思ひもよらず面目を失ひしも、進すが
ら笑ひの種となりて打興じつゝ曲輪を出でたりしは最早子の刻過ぎ
ける故順慶町の夜見世も引けて往來淋しければ各々足を早めて長町
に立歸り、翌日こそは彼の百兩に暖り、今宵の恥辱をすゝがんで
胸工みして河内屋の奥座敷に臥したりけるが、何となく心さへて

もやらず漸く一番鶏の聲する頃とろくどまごろみたるが、早くも
夜明て此所に泊り合せし旅人追々起き出で話聲のするに彌次郎北八
も目覺めて床を出づれば、佐平次目を擦りながら出で來り、早さく
くと進め立つるにぞ、二人食事もそこくに支度調へ、昨日の積
料着物引張り出して急ぎ行くまゝに、頓てかの座摩の宮なる富會所
にぞ至りける。

北「急ぎ候程にもふこれだく彌次さん這入らねへか」
「手前先へ
入れ」

北「へ、何うやら耻かしい様だハ、モシ少とお頼ん申しやす、
私等昨日の一の富に當りやした、金子をお渡し下さりませ」

と云へ入れるを世話人と見へ羽織着の一人早速にたちいで「コレの宜うこそサア、此方や御通りなされ」と玄關へ上げてしばらく待たせて又出で来り「金子お渡し申します、先づお神酒を一献お飲りなさいまし」

彌「これは御丁寧なハ、ハ、ハ」

北「何にが其んなに可笑い、お辭儀なしに始めなせえ」

○「誠に早やこの多くの札敷のうちにて、一の富にお當りなさるは云ふは御運の開ける瑞相、私し共も貴郎方にあやかる様にお盃を一つ頂きませう」

彌「左様なれば憚りながら」

○「イヤ先づ貴郎へ」

彌「これは御馳走でございます、オホ、ハ、ハ、」下地は好きなり御意はよし、大勢の人の挨拶を受けて差しつ押へつ飲んで内、臆て微酔となつた時分、

○「御時分でございます、粗末の出来合ひを差しあげます」酒を引いて本膳を据へる。

彌「モウお介意ひなさいますナ、ハ、ハ、ハ、イヤモウ面白くて堪へられねえ」

三人共思ふ様に食つて仕舞ふと早退膳を引く、處へ當社の神職らしき一人先きに立ち、講中二三人付き添ふて南縁にて百兩、三賣に

積み上げたのを目八分に持ち出で三人の前に差し置く、彌次郎兵衛
北八はこれを見るよりゾウ〜として有頂天となり、ニコ〜もの
で控へていると、

神主「扱て各々方には始めて御意得ます、拙者神職の名代でござり
ます、先づはお喜び申し入れませう、お目出度い事とございま
す」

北「ハイ〜」

神主「では金子をお渡し申します」

北「ハイ〜」

〇「ニ、時にお願ひがござります、当社御覽の通り大破につままし

て再建のため興行いたしました富でござりますれば、お當りなされ
たお方へは誰方へもお願ひ申して百兩のうち十兩丈け寄進におつき
申してお貰ひ申しますさかい貴郎方も左様なされて下さりませ」

北「ハイ〜」

講「又た外に御願がござります、是も凡て左様に致します、金子五
兩世話人供へ御祝儀と致してお貰ひ申し度うござります」

北「ハイ〜」

講「まだ一ツござりますわいな、今五兩あど札を御買なされて下さ
りませ」

北「ハイ〜」

講「左様なら百兩の内廿兩引きままして御渡申しますさかい其で宜ござりますか」

彌「ハイ、何うなりとも宜しくなされて下さりませ」

講「左様なら其の札を是へ御出しなされ引替に金子御渡し申しませう」

北「ハイ、是れに御座りやす」

と件の札を懐中より出して渡せば、講中手に取りピツタリし 講「モシ札は是れ計りかいな」北「其れ計りさ」

講「コリヤ違うたわいな」北「ナニ違ふたとはアノ一の富は八十八番じや御ざりやせんか」

講「左様じや八十八番じやわいな」

北「そんなら何が違ひました」

○「この干支が違ひます、當社の札は皆番付の上十二支が付いてある、一の富は子の八十八番、お前さん方の持つて来たのは亥の八十八番ぢや」

云ふのは此處の札、惣べて十二支を頭に付けてあるから、同じ番数の札が十二枚づゝある、北八はこれを知らずたいウツカリして居たから此の間違ひが出来た、兩人はこれを聞くよりハツと驚き、グダリと投げ首して、

北「エ、そんなら三文にもなりませんか、彌次さんこりア何うした

ものだらう」

「ア、く、何んと云つたら宜いか、ネツカラ薩張り力が落ちて俺アモウ何うも」

「エ、何んだお前え泣くか業晒しな」

「こりアお前さん方も能く札を改ためて来たが宜い、馬鹿な人達ちだ」

「神主イヤそんなら早く出て行けく」

「ハイくこりア思ひ掛けもない御馳走になりました、なんなら干支位は間違つても宜うございますから、何うぞ今の金子を」

「阿呆な事ぬかしやがるな、此のならず者奴が……」

「ハイ若しもの間違ひはあり勝なものだ、そんなに安く言ひやがる事は無へ」

「たは言云ふご突倒すぞ」

「コレサ此方が悪いのだ、御馳走に遇ふて氣の毒じやさかへ仕様事がないサアく立ちなはれ」

「ア、コレく巳が後を抱へて呉れ」

「ハット思ふと其まゝ腰が伸されぬア痛、」

「エ、意氣地の無へ、サア立ちねへな」

「あい痛、」と立上りしが、ひよろくとして歩かれず、

ツ還になりて立關に出づれば、そろへの着物着たる人々口々に「強
い奴じや、彼様な事言ふて酒のみに來たんじやろい、晝盜賊めが」

北「何だ忌々敷奴等だ、横ッ顔張り飛ばすぞ」

人々「ア、宜し打て來ませ」

と皆々立掛るを佐平次中に入りて押なだめ 佐「サア宜へかいの、此
方ごんせ〜」

と無理に北八が手を引張り先へやり彌次郎がよい〜の足付きを介
抱しながら漸々と境内を出たれど、二人共元氣落ちて氣振のしたる
如くぐんにやり。

北「ホンに勘平ちや無いがする事爲す事いすかの嘴だ、今思へば夕

への占者が強い事をぬかしやがつた」

百兩の的ははづれて當らねど能く當りたるさきのうらない

北「エ、歌どころかコリヤ最う詰らねへものになつた」佐「サイのお
氣の毒なこつちやわい」

北「コリヤ全體佐平さんお前が悪い、私ら他國者で、此の土地の脚
手は知らずアノ札の十二支の廻屈も云つて聞かして呉んなさると何
も此んなに番狂せは無かつた物を、忌々敷一層の腐れに是から何處
ぞ遊びに連れて歩びなせい」

佐「ホンニ私も根つかから氣が附かなんだわいのマア一返り戻りなさ
れ、其衣物の事もあるさかい」